**日本寄語の「主人　床杲孕」と**

**「天　天帝」を解読する**

HP：「日本語の起源」

<https://ichhan.sakura.ne.jp>/japanese/japanese4hp.docx

　　　　　　　　　　　　　　ichhan

　　　　　　　　　　　　　　　　　　2023.9.22

**目次**

1. はじめに p2
2. 「床杲孕」は「」と読めるか p2
3. 「床杲孕」は「」と読めるか 　　　　　　　 p5
4. 「床果木乃」は「」と読めるか　　　　　 p9
5. 「主人」は「山人」のまちがいか　　　　　　　　　　　 p11
6. 「床果」の「床」は「サン」と読めるか　　　　　　　　　　p13
7. 「主人　床杲孕」の解読経過 p16
8. 「天　天帝」を解読する p18
9. 「ティダ」の語源を考える p21
10. 「ティダ」（太陽）は天道にさかのぼるか p26
11. 텬/텬다（天と太陽）の関係をどう考えるか p28
12. おわりに 　 p32

【注】　　　　　　　　　　　　　　　　 p32

【引用書など】 p53

1. はじめに

昨年（2022年）9月に更新した後、Windows11とWord21年版に買い替えたのですが、そのためハングルや文字構成がくずれてしまいました。そこで2019年ころからの更新分（～/korean/korean1hp.docx以後）の誤字や内容の簡単な見直しに2か月近くを費やしました。

その後、11月ころには「日本寄語」の解読に興味がうつり、暮れも押しせまった12月26日に「1.天　天帝」にたいする解読のアイディアがわき、そこでそれを更新のテーマにしようと考えるようになりました。そして今年に入って1月4日朝に「103.主人　床杲孕」の解読のアイディアがまとまり、当日、中国人若手研究者の馬之壽氏にメールを送り返信をもらって、それもあって問題点をみつけました。そこでHPの更新のテーマを「103.主人　床杲孕」の解読として考え続けたのですが、5月に体調を崩し、そのため解読を急遽とりやめ、「1.天　天帝」について書くことにしました。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2023.9.22

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ichhan

1. 「床杲孕」は「」と読めるか

「日本寄語」とは明代に倭寇が猖獗をきわめ、その対応に追われた当時の定海県（いまの浙江省寧波県）知事鄭余慶が薛俊に命を下し、編纂された『日本国考略』注１のなかの中国語日本語対訳語彙を集めた「寄語略」（以下、日本寄語）をさします。その日本寄語以前には『鶴林玉露』と『書史會要』注2にわずかばかりの対訳語彙がみられますが、明代の対訳語彙集としては『日本館訳語』『日本一鑑』『日本風土記』など注3がみられます。

この「日本寄語」の解読は早く江戸・明治時代から行われていますが、全語にわたって解読されたのは次の浜田・大友・馬氏の3氏だけ注4です。

A.「日本寄語解読試案」『日本寄語の研究』（濱田　昭和40.9：79-142）。

B.「第三章三節　「寄語略」の解読」『室町時代の国語音声の研究』（大友　昭和38：140-224）。

C.「第3章第2節　寄語の解読」『2015年早稲田大学博士論文』（馬　2015：42-93）。

D.「「日本寄語」語解」『国語学』（36輯）（福島　昭和34.3：69-78）。

ところでこの『日本寄語』は最も解読がむつかしいものとして知られ、何から手をつけてよいのかまるっきりわからない語も多数収録されています。そこで今回は最難関といってよい「103主人　床杲孕」（京大國語學國文學研編　昭和40.9：102,影印16上）の解読をしてみたいと思います。

まず「日本寄語」の「主人　床杲孕」を解読するためには当時の「日本寄語」がどのような方音で表記されていたのかを知る必要があります。そして「日本寄語」は薛俊（明時代寧波府内だった定海県の人）の撰であることから南方方言注5の一つである呉方言とみられます。しかし呉方言注6といってもその内部方言の違いは大きいのですが、馬氏は「日本寄語」の方音を寧波方言注7と特定されました（馬　2015：1-2）。

そこでこれからの日本寄語の解読はその方音を寧波方言として考察していくことにします。

まず大友氏の解読を次にみておきます（大友　昭和38：165）。

「103主人　床杲孕　不明

「主人」は中国語も国語も相違がない。**エ**（筆者注：明治初めの日本語研究者Edkins。以下同じ）は「答晏孕」を（danna）と読み、**今**（＝今西春秋）は不明としている。**浜**（＝濱田敦）は本文が疑わしいとして、「杲乃朶」で「コナタ」か、或は「床」は何か「オヤ」に当たる字の誤りで、とすれば「オヤカタ」と読めると述べている。（略）「オヤカタ」とでも読めそうだが、その様な異本はないので不明としておく。」

大友氏がいわれるように「床杲孕」の読み（音注）は不明です。そこで解読の常套として「床杲孕」を現代の方音で読んでみると、次のようになります。

呉方言：

寧波方言：「z kɔ tɕiŋ」（湯・陳・呉編纂　1997：236,89,266）。

杭州方言：「dzʮɑŋ kɔ tsen」（鮑編纂　1998：259,107,214）。

普通話：chuang găo yùn。

＊「床・杲・孕」の音は「牀・高・證」で代用。「床」は「牀」と同音。「杲」は「暠」（上声）と同韻（「高」は平声）。「孕」（證韻4等iŋ）は「證」（證韻3等ɪŋ）で代用。

＊以下、本考察では声調の表記は省略します。

大友氏は「主人」の中国語と日本語の意味には違いがないとされているのですが、上の現代方音から類推しても当時の「床杲孕」を「シュジン」（主人）とはとても読めそうにありません。また「主人」を「アルジ・ヌシ」と考えても「」（日本大辞典刊行会編　昭和50：15巻581）はみられますが、はみられず、また同義語の「・」などにも読めそうにありません。

そこで次善策として異本にみえる「床・杲・孕」の表記「牀・杲・呆・果・泉・朶」注8に改めてみても「床杲孕」は読めそうにありません。そこでなお大胆に「床・杲・孕」にまぎれそうな字として、「床」を「麻・庄・庁・庥」、「杲」を「杏・杳・枲」などと考えても、中国語「主人」に適する音訳（日本語の読み）をみいだすことはできません。さらに人物類にある「主人」の「主」にまぎれる用字として、「用人・王人・生人・圭人」などと考えなおしてみても「床杲孕」を読むことはできそうにありません。

この解読の困難な「主人　床杲孕」にたいして、馬氏の解読は次のようになっています（馬　2015：59）。

「103.主人　床杲孕（△△△）」

（略）Eは「床杲孕」を「答晏孕」と改めてdannaと読んだ。他では解読していない。中国語の「主人」には夫の意味がないので、ここでは保留とする。」

　このように馬氏は中国語「主人」には日本語の「夫」の意がないとして、ダンナの読みを否定されています。しかし中国語の「主人」をEdkinsのように「旦那」と読むことはできないのでしょうか。そうこう思案しているうちに中国語「主人」を日本語の「旦那」とみるアイディアを2023.1.13に思いつきました。そこで解読の順序を逆にして、「主人」を「」と読む筆者の考えを紹介します。

そのため明治前後、呉人が編集した中国語日本語の対訳書注9をみてみると、次のような音訳がみられます（大友・木村編　昭和47a：14,15/同書：64,65/同編　昭和47b：20,21）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 吾妻鏡補（1815年版行） | 東語簡要（1884年上梓） | 東語入門（1895年刊） |
| 人物類 | 人倫門 | 人倫門 |
| 237夫　〈須〉 | 108夫　〈須〉 | 385丈夫 |
| 270烏龜 | 119東家 | 422家主 |

＊「丁頂山」（亭主さん）。「退以希油」（亭主）。「希勤」（主人）。

＊烏龜：「①動亀.②旧時,妓楼の主人➂女房の姦通を黙認する意気地ない亭主」（愛知大学中日大辞典編纂処編　1968：1504）。

＊「」（轡（＝廓）殿）は「廓の亭主・忘八」注10（日本大辞典刊行会編　昭和

48：6巻546,666/昭和50：15巻104）。

＊「451主人　」「し-じん[主人]＜「しゆ・じん」ノ訛転＞」（大友・木村編　昭和47b：23,148）。

ところで日本語の「主人」にたいする中国語はいろいろあります注11が、そのなかで「東家」注12（「②旧時，（店員・雇い人に対する）主人」；愛知大学中日大辞典編纂処編　1968：354）がみられます。そこで上の東語簡要で「東家」を「」（旦那さん）としているので、日本寄語の「主人」が「妻」の意でなく「東家」（店の主人）であればその音訳をEdkinsのようにdanna（旦那）とできるのではないでしょうか。また『吾妻鏡補』でも「烏龜」（旧時、妓楼の主人）を「」（廓殿）と音注しているので、標目の「主人」が遊女屋の主人（＝忘八）をさすのであれば、「床杲孕」を「旦那」とみることができるでしょう。

そこで「主人」を字形の似た「王八」（＝忘八）にあらため、「王八」の音訳を「」（旦那）とする考えを2023.1.13に思いつきました。さらに1.29朝には寧波方言詞典に「【主人家】⇒〖東家〗」（湯・陳・呉編纂　1997：7）をみつけ、「主人　床杲孕」を「主人□　大晏奶」（旦那：□は家の脱落）とあらためることができるのではないかというアイディアもわきました。

しかし「主人」を「王八」とあらためるのは字形の似かよりから問題ないとしても、「床杲孕」を「大晏奶」と改め、「ダンナ」（旦那）と読むことには「床杲孕」と「大晏奶」の文字の違いが大きく、無理があるでしょう。また標目が「王八」（＝忘八）であれば、その音注は「同音」、もしくは唐音の「わんぱ」（日本大辞典刊行会編　昭和51：20巻706）で十分だったと思われます。また日本風土記（語音の「流賤」の項）に「忘八　低使　ていむママ」（京大国語学国文学研編　昭和36：影印65下）がみられ、女郎屋の主人（忘八）は旦那ではなく亭主と音訳されているので、標目「王八」が女郎屋の主人の意味であれば旦那ではなく、亭主と音訳されたのではないでしょうか。そこで「主人」を「王八」や「主人家」（□は誤脱）とあらため、その音注を「大晏奶」（旦那）とする考えも無理と思えました。

1. 「床杲孕」は「」と読めるか

前節では解読の順序を逆にして「王八/主人家　大晏奶」（：家は誤脱）を考えたのですが、ここからは最初に考えついた解読に戻ることにします。

昨年（2022年）暮れ、『日本風土記』（語音）に次のような不思議な音注をみつけました（京大国語学国文学研編　昭和36：影印64上）。

「主人　陽脉那/許多　あるのいママ人」

＊割注は/で示す。以下、同じ。

ところで上の音注は何とも不思議な音注ですが、前節の日本寄語の音注「床杲孕」からなんらかの影響をうけていると考えれば、標目「主人」は「山人」注13の間違いではないかという考えがわいてくるでしょう。また「孕」は日本寄語を転載した『日本図纂』注14（1561年）などでは「朶」（京大國語學國文學研編　昭和40.9：影印45下）となっているので、「孕」を「朶」の誤字と考えると、その「朶」は縦書なら「乃木」と見間違うことはありそうです。そうこう考えていて、「乃木」は「ナモ/ノモ」と読めるのではないかとアイディアがわきました。そして「乃木」（＝朶）を「木乃」とひっくり返すと「モノ」と読め、これは「者」の音注ではないかと思いつきました。そこで「床杲木乃」（←床杲孕：□□）は「」や「の」と読めるのではないかという考えが浮かびました。

そこで「」や「」の意味を日葡辞書でみてみると、次のようになっています（土井・森田・長南編訳　1980：808,786,787）。

「Yamagatcu．ヤマガツ（山賤）　身分の賤しい人，または,山林で育った人」

「Xizzu.シヅ（賤） 下賤な者ども.（略）」

「Xizzunome,Xizzunouo.シヅノメ，シヅノヲ（賤の女,賤の男）　Xizzu（賤）の条を見よ.」

しかし「床杲１木２」（床杲な者：１はナ、２はノの音訳字）を「な」注15（あるいは「」）とみる考えも適当ではないと思いました。その後、日葡辞書に「Yamaga.ヤマガ（山家）　山の中にある家．卑語」（上書：808）の語をみつけ、年を越えて2023.1.4朝に「主人」の音注「床杲孕」を「１麻果乃木２」（１はヤ、２はノの音訳字：な者）注16とみる考えがでてきました。

さてこのようなアイディアがわいたので、当日（2023.1.4）中国人解読者である馬氏にメールを打ったのですが、その後、次のような問題点をみつけました。

1．「□麻果乃木□」（な）と解読すれば誤脱（□）が多すぎる。

2．当時の言葉としては「な」より「」のほうが相応しい。

3．「□麻果乃木□」の「果」はガとよめるか。

まず「主人　床杲孕」を「山人　」（山家な者）と解釈するには「主→山」、「床→麻」、「孕→朶→乃木」と改めなければなりません。さらにヤとノの2字の脱字を考えなければならず、こんなに誤字・脱字の訂正をしてもよいのか疑問がでてきます。

次に問題2は当時の言葉としてみると、助詞ノ（あるいはナ）がある「ヤマガノ（ナ）モノ」（山家の（な）者）より助詞ノがなく、直接「山家」と「者」が結合する「ヤマガモノ」（山家者）のほうが相応しいのではないかと考えられます。また日本風土記に「～な者」という音注がみられるとはいえ、この「～な者」という音注も取ってつけたように感じられ、少し違和感を覚えます。そこで脱字が一つでも減るという利点もあり、「朶」→「乃・木」→「木・乃」と改めて、「□麻果乃木□」（な）ではなく、「□麻果木乃」（）として、考察をつづけることにします注17。

　さて3は大きな問題があります。「□麻果木乃」の「果」は果摂上声果韻見母（全清声母）kuaで、現代寧波方言では「kəu」（湯・陳・呉編纂　1997：185）、また呉・漢音ともに「カ（クヮ）」（藤堂編　昭和53：632）であることから、この「果」は清音カの音注字と考えられます。そのため「果」は清音カの音注としてはよいとしても、濁音のガの音注に使用することには不適で「ヤマガモノ」（山家者）と読むことには無理がでるでしょう。このように考えてくると、「主人　床杲孕」を「山人　□麻果木乃」（）と改めることには疑問が残ります。

ところで日本国語大辞典には「（）」だけでなく、平安時代には同じ意味である「」があることに気づきました。この漢語「」（「家」は麻韻見母kă）は「山」（山韻ṣʌn）の鼻音韻尾nの影響で「」が連濁しサンガになったと考えることができます。そこで「主人」の音注「床杲孕」を「床杲木乃」（孕→朶→乃木→木乃）と改めれば、「」（山家者）→サンガモノ（連濁）→ヤマガモノ（訓読み：山家）のような変化を考えることができるのではないでしょうか。

そこでこの考えが成立するのかを確かめるために、それらの語の存在を日本国語大辞典と日葡辞書で調べ注18まとめると、次のようになります。

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | | 山家・山家者 | | | | | 山賤 | 山人 | |
| さんか | さんが | | やまか | やまが | やまがつ | さんじん | やまびと |
| 日国 | 山家 | サンカ | | × | × | ヤマガ | ヤマガツ | サンジン | ヤマビト |
| 山家者 | × | | × | × | ヤマガモノ |
| 日葡 | 山家 | Sanca | | × | × | Yamaga | Yamagatcu | Sanjin | Yamabito |
| 山家者 | × | | × | × | × |

＊「」は「類聚本元永元年十月内大臣家歌合（略）」（日本大辞典刊行会編　昭和51：19巻545）に、「」は「懐風藻」（奈良時代天平勝宝3年：751年）の序文（同編　昭和49：9巻201）にみえます。

上表をみてわかるように「サンガ」の言葉はなく、サンカ→サンガ→ヤマガの変化を想定できず、「床果木乃」を「」と考えることはできないでしょう。

このように「主人」を「山人」、また「床杲孕」を「床果木乃」（）とみる解読には無理がみられますが、解読の方向性は魅力的です。そこで、「山人　床果木乃」（）と考えて注19、さらに考察を続けることにします。

ところで「」の「果」をカと読むことには少々（大いに）問題があります。なぜなら果摂と仮摂は上古以来異なった韻とみられているからです。

たとえば中古音（韻鏡）においては果摂見母と仮摂見母の音は次のように異なっています（藤堂・小林　昭和46：78—85）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 平声（開・合） | 上声（開・合） | 去声（開・合） |
| 果摂1等見母 | 歌・戈韻（ka/kua） | 哿・果韻（ka/kua） | 箇・過韻（ka/kua） |
| 仮摂2等見母 | 麻韻（kă/kuă） | 馬韻（kă/kuă） | 禡韻（kă/kuă） |

＊「果」：kua（内転第28合果摂上声1等果韻見母）。

＊「家」：kă（外転第29開仮摂平声2等麻韻見母）。

＊果・仮摂は入声なし。仮摂開口には歯音系列（章組3等・精組4等）などもあり。

また日本寄語においても果摂歌韻字と仮摂麻韻字は次のように異なった音注に使用されています注20（馬　2015：84,75）。

「294.小麥　柯蒙崎（コムギ）」

「209.寫字　加計（カケ）」

＊「柯」（果摂歌韻ka）。「加」（仮摂麻韻kă）。

＊ 日本風土記の「那」（果摂歌韻字na）の音注ノについては注21。

そして現代の寧波・舟山・杭州方言（注6・7）でも果摂果韻（果）と仮摂麻韻（家・麻）字は次のように音注は異なっています。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 寧波方言 | 舟山方言 | 杭州方言 |
| 果摂果韻ua | 果桶kəudoŋ | 果桶kaudoŋ | 果真kutsen |
| 松果（管）soŋkũ/青果tɕhiŋkau |
| 仮摂麻韻ă | 家ko | 親家tɕiŋko | 家tɕiɑ |
| 家務事ɕiaɦuzɿ | tɕia家加痂嘉佳皆階甲 |
| 麻雀moɕhiã | 麻雀（將）motɕiã　麻雀（下注） | 麻子mɑtsɿ |

＊寧波方言：湯・陳・呉編纂　1997：185,102,69,96。

＊舟山方言：方　1993：110,112,113,122,46,114。

＊杭州方言：鮑編纂　1998：33,66,52。

＊声調は略。「家」（kă)の口蓋化(k→tɕ)は近代以降（藤堂　昭和62：167-171）。

このように中古音（韻鏡）や日本寄語、さらに現代においても果韻字（果摂）と麻韻字（仮摂）の音注は異なっているので、「主人　床杲孕」を「山人　床果木乃」に改めれば「サンコモノ」と読むことはできるでしょうが、「サンカモノ」（）と読むことには無理があると考えられるでしょう。

1. 「床果木乃」は「」と読めるか

前節では「床果木乃」は「サンカモノ」（山家者）と読めないと考えたのですが、その後「サンカ」の言葉には漂泊民などの意の「」があることに気づきました。

「山窩」とは次のようにみられています（日本大辞典刊行会編　昭和49：9巻201-2,328）。

1.「さん-か…クヮ【山窩】〘名〙①定住しないで、（略）自然人のような生活をしている漂泊民。竹細工・狩猟などを業とする。さんわ。②山のふもと、河原などに小屋がけをして、昼間は乞食などをし、夜間窃盗を働く者をいう。盗人仲間の隠語。〔日本隠語集〕語源説（1）本義は不明であるが、サンカ（算家）、すなわち占卜を業とする者の意か。または、一種の笊を製造する者をいうサウケの転訛か。当て字としては、家が固定していないところから「散家」、山の陰に住んで盗伐によって生活するところから「山家・山稼」、岩の窪みに住む意の「山窩」などがある。（以下、略）」

2.「さん-わ【山窩】〘名〙（「わ」は「窩」の正音。「か」は慣用音）⇒さんか（山窩）」

＊「窩　ワ・カ（クワ）」：藤堂編　昭和53：949。

ところで果・仮摂の見母字は日葡辞書に次のようにみられます（土井・森田・長南編訳　1980：553, 335,553,556）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 果摂 | | 仮摂 | |
| 歌韻開口（河ɦa） | 戈韻合口（果kua） | 麻韻開口（家kă） | 麻韻合口（花huă） |
| Sanca　山河 | Ingua　因果 | Sanca　山家 | Sanqua　山花 |

＊「Sanca.l,xenga.サンカ,または,センガ（山河）（略）」「Quajit.クヮジ***ッ***（花実・果実）」「Quaxi.クヮシ（菓子）」（上書：553,517,521）。

上にみられるkwa/gwaの音はカ・ガ行合拗音といわれ、その変化は次のようにみられています（外山　昭和47：205）。

「（上略）一方、クヮ・グヮの音は、本期（筆者注：院政～室町時代）を通じて用いられていたらしい。（略）後期末のキリシタン資料でも、Ca・Ga・Qua・Guaと区別して写しわけている。たとえば、『イソポ物語』などでも、（改行）quagon（過言）　guanrai（元来）（改行）のごとく。（略）」

ところで前節でみたように果摂と仮摂は上古以来区別され、日本寄語時代の果摂は主にオ段、仮摂はア（またはオ）段の表記にみられ、「果」はカではなくコと読まれたと考えられます。そこでいま仮に「山人　床果木乃」の「床果」を「山家」（家は仮摂麻韻のkă）ではなく、「倭」（果摂平声戈韻影母ʔua）と同音「窩」注22の「山窩」を考えます。すると「窩」（慣用音クヮ）はその後、クヮ→カの変化が起きているので、「山人」の音注を「」であったと考えると、「床果木乃」（者）→「サンカモノ」（）の変化を考えることができるでしょう。

そこで日本寄語時代の北方方言と寧波（南方）方言のそれぞれの果摂（果）注23と仮摂（家）の変化を次のように考えることができるでしょう。

　　　　　　　　　　　 　　　　8世紀 　　　　　16-7世紀　　　現代

日本語（日葡辞書：1603年）：　クヮ/カ---------→　　　 カ（同音）

　　　　　　　　　　　　　　　 　↗

普通話　：x0/y0（果/家）┬--→kua/kă（中古音）---------------→guŏ/gū（拼音）

寧波方言：　　　　　　 └--→x1/y1-------------┬------------→kəu/ko

日本語（日本寄語：1523年）：　　　　　　　　　　　　　　カ（同音）

　＊x0/y0は北方方言（南北方言分化以前）、x1/y1は呉方言（南北方言分化後）の果韻と麻韻の音。

＊「果」は「カ（クワ）」。「家」は「ケ・カ」（藤堂編　昭和53：632,358）。

このように日本風土記時代には「コ」の音注として用いられていた「」（果摂kua；「Quafô　果報」（土井・森田・長南編訳　1980：516）を「」と考えれば、「」（＝者）→「者」への変化を考えることができるでしょう。

1. 「主人」は「山人」のまちがいか

ところでまえから気になっていたことがあります。それは馬氏のメール（2023.1.7の私信）のなかにも指摘があった「主人　床杲孕」を「山人　□麻果乃木□」（な）と改めた「山人」の中国語と日本語の意味の違いです。

　そこで中国語と漢和辞典の「」の意味を次にみてみます。

1.中国語辞典：

「〔山人〕shānrén　隠士．世捨て人.」（愛知大学中日大辞典編纂処編　1968：1243）。

2.漢和辞典：

a.「【山人】サンジン①世を捨てて山中に隠れ住む人。（略）」（藤堂編　昭和53：387）。

b.「【山人】サンジン①（略）②世をすてて山中に住む隠士。（略）」（佐藤・濱口編　2018：435）。

＊「」と「」の意味は日本国語大辞典と日葡辞書では多少混交しています（注18参照）。

このように現代中国語と漢和辞典の「山人」には隠士、日本語では「」（山に住む人、人；日本大辞典刊行会編　昭和49：9巻260）や「」（前節：漂泊者）となっていて、両者の意味には違いがみられます。そこで「主人　床杲孕」を「山人　床果木乃」（→）に改めたとしても日本語と中国語の意味に違いがみられ問題が残ります。また標目の「主人」を「仙人」（仙人の意）や「樵人」（樵夫の意）と改めても、その意味や字形の違いは依然として問題となるでしょう。

ところで「主人　床杲孕」を「山人　床果木乃」（）と考えることにはまだ問題があります。なぜなら「山人」の音注が「床果木乃」（）であれば、「床果」そのものが漂泊者をあらわす語なので、「床果木乃」ではなく、「床果」で十分だったと考えられるからです。

そこでこの問題を考えるために中国語「山窩」の意味をみてみると次のようになっています。

中国語辞典：

A1. 「[山窩（子）] 　shānwō(zi)＝‘山窩窩’〔名〕へんぴな山あい地区。山のはざま。山あい。（略）」（大東文化大学中国語大辞典編纂室編　平成6：下巻2658）。

A2.「〔山窩子〕　shānwō・zi⇒〔山洼子〕」（愛知大学中日大辞典編纂処編　1968：1243）。

B1.「〔山洼子〕　shānwā・zi＝〔山窩wō子〕谷.」（同書：1243）。

B2.「[山洼子] 　shānwāzi〔名〕山ふところ。山間のくぼ地」（香坂編著　1982：1070）。

C.「〔窝・窩〕　wō①ⓐ巣（略）ⓑ住み家.家.居室（略）」（愛知大学中日大辞典編纂処編　1968：1500）。

D.「〔洼・窪〕　wā（Ⅰ）〔洼〕水のある窪地（くぼち）.湖沼.（略）（Ⅱ）〔窪〕①くぼんでいる.（略）②くぼんだ地.くぼみ.（略）」（同書：1456）。

『大漢和辞典』：諸橋　昭和41縮写版：4巻185/4巻217/4巻217。

1.「【山家】97　サンカ❶やまが。山中の家。山戸。山舎。〔南史、侯景傳〕（略）」

2.「【山窩】1125　サンワ/サンクヮ（略）自然人のやうな生活を營んで來た漂泊性をもつた賤民をいふ。（略）。」

3.「【山窩子】1126　shan1 wo1 tzŭ　谷。」

上の諸橋大漢和辞典をみても「山窩」の古例はみられず出所文献名もあげられていません。筆者には中国語「山窩」の語史はわかりませんが、日本語の「山窩」の語は問題をもっているとみてよいでしょう。

ところで日本語「サンカ」（山窩）は当て字として「散家・山家・山稼」（前節）などの表記がみられ、それらは漂泊者を意味しています。たとえば「山家」（サンカ・ヤマガ）は「山の家」であって、「山人」（サンジン・ヤマビト：山に住む人）の意味はありません注18。このように漢語の「山窩」には接尾語の「者」がないのに、漂泊者という意味をもっています。

そこで中国語「山窩」と原義不詳の漢語「」の関係を次のように考えることができるでしょう。

中国語：「山窩（子）・山洼子」（山間のくぼ地・谷など）

漢語　：「山窩」（漂泊者）

＊「【名詞接尾辞】接尾辞はまず「子」が魏晋から普遍化してゆく。（中略）元来「子」は〈指小語〉で小さいもの，かわいいものをあらわすが（略）。唐代にはこの「子」が指小性を持たぬ「宅子」（『黙記』）（略）などにもつきはじめる。」（志村　昭和42：266-7）。

上のような関係を考えて、標目「主人」の「主」を「洼」、音注「床杲孕」の「杲」を「果」、「孕」（『日本図纂』では朶：注8）を「乃木」の誤りとみます。さらに日本風土記の「主人　陽脉那/許多」（第3節）や「山陽脉人許多」（ヤマノヒト：注13）から「主人」を「山人」（ヤマノヒト）の誤りとみることができるでしょう。そこでこれらを勘案して、「主人　床杲孕」を「１洼人　」（な：１は山、また２はノの誤脱）と解読することができるでしょう。しかしこの解読には誤脱や多くの誤字の改変、辞書にみえる「山洼子」（山のくぼ地）ではなく「山洼人」（くぼ地に住む人の意）、また日本風土記と同じ少々違和感のある「～な者」といったことを想定しなければならず問題は大いにあるでしょう。また「」（な）といった違和感のある音注を想定せず、「山洼人　」（：山の誤脱）としても問題はかわらないでしょう。

1. 「床果」の「床」は「サン」と読めるか

ここまで「床果」を「サンクヮ」（山窩）と読めるかどうかは不問にして考察を続けてきましたが、ここからは「床」を「サン」と読めるかという問題を考えることにします。

日本寄語におけるサの音訳字には次のようなものがみられます（馬　2015：109）。

「　サ・ザ：沙1、山1、三2、殺2、晒9、篩2、索2、撒2/柴1

ソ・ゾ：沙1、踈1、所1、梭1、鎖1、蘇1、孫2、篩1

（中略）寧波西洋人資料では次のように表記している。

沙所sô[sɔ]、山三sæn[sɛn]、殺撒sah [saʔ]、晒sa[sa]、篩s[sɿ]、索sôh[sɔʔ]、柴za[za]、踈蘇su[su]、梭鎖so[so]、孫seng [seŋ]

サ・ソに当てる漢字は心母字（筆者注：1等s）または生母字（同じく2等ṣ）であり、章母字（同じく3等ʃ）のないことがわかる。（略）」

＊数字は日本寄語に使用されている回数。

そこで古代から現代までの南方音（主に呉方言）によるサの音訳字注24がどのように使われているのかをみてみると、次のようになっています。

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 音訳字 | 漢音 | 鶴林  玉露 | 書史  会要 | 日本  寄語 | 日本  風土記 | 日葡  辞書 | 吾妻  鏡補 | 東語簡要 | 東語  入門 | 寧  波  方  言 |
| 方言 | 北方長安方言 | 浙江 | 浙江  松江 | 浙江  寧波 | 浙江  寧波？ | 日本 | 江蘇呉江 | 不明 | 浙江海塩 |
| 時代 | 8c | 13c | 1376 | 1523 | 1592 | 1603 | 1815 | 1884 | 1895 |
| 沙サ | サ | 〇 | × | 〇 | 〇 | 〇 | × | × | × | so |
| 篩サ | シ/サイ | × | 〇 | 〇蒒 | × | × | 〇 | 〇 | × | sɿ |
| 殺サ | サツ | × | × | 〇 | 〇 | × | 〇 | 〇 | 〇 | sɐʔ |
| 三サ | サム | × | × | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | × | sɛ |
| 三サン | × | × | × | 〇 | 〇 | × | 〇 | × |
| 山サ | サン | × | × | 〇 | 〇 | × | 〇 | 〇 | × | sɛ |
| 山サン | × | × | × | 〇 | 〇 | 〇 | 〇 | × |

＊「297總督　」（東語入門；大友・木村編　昭和47b：16）の「」などサ以外の音注はのぞく。

上表をみればわかるように鼻音韻尾字の「三」（咸摂談韻１等sam）や「山」（山摂山韻2等ṣʌn）、また入声韻尾字の「殺」（山摂黠韻2等ṣʌt）などが使われるのは16世紀ころ以降になってからのようです。

ところで日本には古くから呉・漢音注25（新漢音注26）が伝わっていますが、それよりも新しいものに注27があります。

有坂氏はを次のようにみられています（有坂　昭和32：192）。

「（上略）故に古臨済曹洞系唐音の起源は鎌倉時代に在り、宋末元初の頃支那の浙江地方の寺々で行はれてゐた諷經の音を傳へたものと考へておいて、大過は有るまいと思ふ。」

この臨済曹洞系唐音では梗摂と宕摂の鼻音韻尾字「行注28・羹・尚・羊」は次のように違いがみられます。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | | 例字 | 呉音 | 漢音 | 唐音 | 寧波方言 |
| 撥ねる | 梗摂 | 行（庚韻ɦɛŋ） | ギヤウ | カウ | アン | ɦã, ɦ,ɦiŋ |
| 羹（庚韻kɛŋ） | キヤウ | カウ | カン | kã |
| 撥ねない | 宕摂 | 尚（漾韻ʒɪaŋ） | ジヤウ | シヤウ | シヤウ | z |
| 羊（陽韻(j)iaŋ） | ヤウ | ヤウ | ヤウ | ɦiã |

＊ローマ字（韻鏡）は藤堂・小林　昭和46：91,90,87,87。羹は庚と同音。羊は陽と同音。

＊呉音・漢音は藤堂編　昭和53：1168,1032,378,1028。

＊唐音は吉池　昭和62：42,42,41,41。

＊寧波方言は湯・陳・呉編纂　1997：212,240,274,210,238,222。

このように古臨済曹洞系唐音（宋音）の鼻音韻尾字には「梗摂は撥ね、宕摂は撥ねない」（有坂　昭和32：207-8）という特徴注29がみられます。

ところで梗摂の「生」（2等庚韻生母ṣɛŋ）は「シヤウ」（呉音）、「セイ」（漢音）と読まれるのですが、唐音では次のように撥ねてサンと読まれます（有坂　昭和32：198）。

「又、大體蒙古襲來の作と推定される塵袋原註二六には、生の宋音をサンと記してゐるので、第十三世紀末にはチは未だ〔ti〕に近い音であったことが證明される。」

＊『塵袋』注30：著者未詳。鎌倉時代中期1274-81年ころ成立か。

＊宋音の入声については注31。

そこで各時代の「生」の読みを次にみてみると、次のようになっています。

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 音  訳  字 | 8c | 13c | 1523 | 1603 | 1684 | 1815 | 1884 | 1895 | 現代 | |
| 漢音 | 塵袋 | 日本  寄語 | 日葡  辞書 | 小叢林略淸規 | 吾妻  鏡補 | 東語簡要 | 東語  入門 | 寧波  方言 | 杭州方言 |
| 生 | セイ | サ・サン | × | san | サン | × | サン | × | sã,səŋ | sen |

A.漢和辞典：「セイショウ（シャウ）サン」（佐藤・濱口編　2018：951）。

B.塵袋：「」「」（正宗編　昭和52：下巻463,463)。

C.日葡辞書：「Sanya．サンヤ（産屋）」（土井・森田・長南編訳　1980：557）。

D.小叢林略淸規（浙江無着道忠禅師撰)：「梗　開二　庚　生：生サン32（略）」（吉池　昭和62：42）。

E.東語簡要：「91　中國人　」「93　外國人　」「127　醫生　」（大友・木村編　昭和47a：64,64,65）。

F.寧波方言：「sa,səŋ」（湯・陳・呉編纂　1997：208,255）。

G.杭州方言：「sen」（鮑編纂　1998：216）。

ところで『塵袋』から約300年後の「日本風土記」（巻二「生育」の項）に「生衙」注32がみられ、渡辺氏は次のように「うぶや」と訳されています。

原文：「（略）於天井或後院僻静處結盖一小舎名曰生衙～」（京大国語学国文学研編　昭和36：影印30上）。

訳文：「或はのり靜かなる場所に一小舎を立て、名づけて「」といひ、（略）」（渡辺　昭和60：127）。

しかし「うぶや」というのは上代にもみられる和語で、中国人であればその「小舎」（うぶや）は「」注33などと音注したと思われます。

そこでこの考えを確かめるために、日本国語大辞典と日葡辞書の「」を次にみてみることにします（日本大辞典刊行会編　昭和49：9巻319/土井・森田・長南編訳　1980：557）。

1.「さん-や【産室】〘名〙出産する建物やへや。うぶや。（略）」

2.「Sanya.サンヤ（産屋）　Vmaruru iye.（産まるる屋）お産をする家，あるいは，子の生まれる家.一般にGosanya（御産屋）と言い，貴人について用いる。」

＊「うぶ【産】出産に関する意の語構成要素。（略）請為レ我作二一相待矣」＜産室＞（神代記下・私記乙本）（略）」（上代語辞典編修委員会編　1967：128）。

このように当時の言葉に「」があり、前表にみたように浙江地方では13世紀から近代の東語簡要（1884年：注9のB）まで、「生」を「サン」と音注しています。そこで日本風土記の「生衙」は渡辺訳の「ウブヤ」や安田氏の「生衙（しやうや）　二23」（安田　昭和36：解題20）、さらに濱田氏の「しやうや（生屋）生衙　二23」（京大国語学国文学研編　昭和36：国語索引17下）は「サンヤ」に改めるべきでしょう。

そこで日本寄語の時代、寧波方言では「生」は「サン」と読まれていたと考え、「主人　床杲孕」の「床」を「生」と改めて、「山洼人　」（山・□は誤脱：な）、あるいは「山洼人　」（孕→朶→木乃）と改めるのはどうでしょうか。誤字、脱字など問題が多く残りますが。

1. 「主人　床杲孕」の解読経過

A．2022.11～

異本により「杲」を「果」、「孕」を「朶」に改め、その後「乃木」に、さらにはそれらを転倒させ「木乃」と改めてみるが、「主人　床杲孕」を解読できず。

B．2022.12下旬

標出語の「主人」を用人・生人・王人・圭人・大人など、「～人」と考えなおしてみても「床杲孕」は読めず。

C．2023.1.1朝

昨年暮れに日本風土記（影印64上）に「主人　陽脉那/許多　あるのい人ママ」をみつけ、「主人」は「山人」の誤りではないかと考えつく。その後、「主人　床杲朶」を「山人　床杲」（床杲者）、「床杲」（床杲な者：□は誤脱）のアイディアが浮かぶが、「主人」を「山人」（山の人）とあらため、その音注を「」や「な」と考えるには無理があると思えた。

D．2023.1.4朝

「」の語が思い浮び、「山人　」（：□は不明字）と解読するアイディアが浮かぶ。しかし日本寄語では「果」（果韻kua）はカではなくコと読まれているので、「床果」を「ヤマガ」（山家）と読むことはできないと考えなおす。

E. 2023.1.13

標目「主人」を「王八」（忘八の意）とみれば、その音注を「旦那」とできるのではないかというアイディアが浮かぶ。しかし日本風土記には「忘八　低使」（亭主）とあり、「王八」の音注は「旦那」ではなく「亭主」のほうがふさわしいと思えること、またその音注は「同音」、「ボウハチ」（忘八）、あるいは「ワンパ」（唐音：王八）で十分だったのではと思われます。またそれ以上に音注「床杲孕」（＝旦那）をおきかえる適当な文字がみつからず、「王八」のアイディアも無理なのでは。

F．2023.1.22夜

『東方言語史叢考』をよんで、「承和」は「ソガ」、「清和」は「セカ」、（和は倭と同韻、果摂1等平声合口戈韻匣母ɦua）と読むことを知る(新村　昭和2：434-7)。

1.25朝に「」と同じ発音である「」（窩は和と同音）を思いつき、者→者（当て字）→者（連濁）→者（訓読み）の変化から、「山人　床果木乃」を「」と読むことは可能ではないかと考えた。

＊この更新では「承和」（ソガ）のようなサンカ（山家）→ヤマガ（山家）への直接の変化の考察はやめています。

また「山人　」（□は誤脱）にも無理があると気づき、その後「山人　」（山窩者）と読むアイディがわき、「山人」を「」と考えることができると思いました。なお「杲」を「家」の誤字とする「山人　」（山家者）も考えついたのですが、字形のうえから少々無理ではと考えた。

G．2023.1.26

「日本風土記」の日本歌謡「樵子偸桃」に「」（春の山人）の音注（注13）をみつける。

1.7の馬氏からの私信にあった中国語の「山人」（隠士）と日本語の「山の人、隠者」の違いについて考える。『日本風土記』の「生衙」（生育の項）を参考に、「床果」を「生果」（生の唐音はサン）と改め、「山人　生果乃木□」（な者：□はの誤脱）と読んでみる。

H．2023.1.29朝

寧波方言に「主人家」をみつける。そこで「主人家」（＝東家）を遊女屋の店主とみれば、「主人　床杲孕」を「主人□　大晏奶」（：□は家の誤脱）とできるのではと考えた。しかし音注の「床杲孕」を「大晏奶」（旦那）と改めることには無理があるのでは。

＊「【主人家】⇒〖東家」」「〖東家」＝〖主人家〗舊時受雇或受聘者對其主人的叙稱」（湯・陳・呉編纂　1997：7,285）。

I．2023.3～5月か。

中国語「山洼（子）」（くぼ地）と日本語「」（漂泊者）の違いから、また日本風土記に標目「山人」があることを勘案（折衷）して、標目「主人」を「山洼人」に改める考えを思いつき、その音注を「生果乃木□」（な)と考える。

J．2023.5.10

「主人　床杲孕」の解読はつづけていたのですが、時間ばかりが過ぎ、ゴールデンウィークには体調をくずしてしまいました。そこで自身の年齢も考えて「床杲孕」の解読は中止し、急遽「天　天帝」の解読（次節）をのせることにしました。

1. 「天　天帝」を解読する

「天　天帝」の解読は次回にするつもりでしたが、急遽、日本寄語の最初にあげられている「天　天帝」（京大國語學國文學研編　昭和40.9：影印15上）について考えることにします。

まず馬氏の解読を次にみてみます（馬　2015：43）。

「1．天　天帝（テン△）

E（筆者注：Edkins。以下、同じ）はtentoと読み、I（今西）はテントと読み、H（濱田）はテンと読み、O（大友）はテンチと読む。

「天」をテンでよむことは先行研究でも一致しており、問題は「帝」をどう解釈するかである。Oは天地の意味と解釈したが、天文類に属していることと、「地」が地理類に出ているので、天地と解釈することについては少し疑問に思われる。（略）」

このように最近の解読者である馬氏によっても「天帝」の解読はなされていません。

そこで音注「天帝」の解読の手がかりをもとめ『日本風土記』（語音）をみると、次のような音注がみられます（京大国語学国文学研編　昭和36：影印59下）。

「天　同音又所頼/天帝　てん」

＊『鶴林玉露』は注34。『書史会要』の「天」は注35。

この「天」にたいする音注は次のように考えることができるでしょう。

日本寄語の標目　：　　　　 天

↙　↘

日本寄語の音注　：　　　なし/天帝

日本風土記の音注：同音又所頼/天帝

上の比較から日本寄語より後に刊行された日本風土記（語音）の音注は中国語「天」の意味を正しく「同音又所頼」（テン・ソラ）と音注しているのですが、さらに不必要とも思える「天帝」があり、疑問がわきます。

そこでこの疑問を解消させるアイディアを考えるうちに、日本寄語の音注「天帝」はある何かの標目語の音注であり、「天」を音注したものではないとの考えが浮かんできました。

この考えは次のように示すことができるでしょう。

　　　　　第1項　　　第2項　　　第3項　　　　第4項　　　　第5項

寄語の標目：天　　　　　２　　　　　日　　　　　　月　　　　　　星

寄語の音注：１　　　　　天帝　　　　虚路（ヒル）　禿計（ツキ）　付泥（ホシ）注36

風土記音注：同音又所頼㇍天帝 てん　 和虚　おひ注37　紫氣　つき　　伏西　ほし

＊日本寄語：京大國語學國文学研編　昭和40.9：影印15上。

＊日本風土記：京大国語学国文学研編　昭和36：影印59下。

そこで寄語の第1項の音注（１）と第2項の標目語(２)が脱落し、第1項の標目「天」と第2項の音注「天帝」が残されたと考えると、日本寄語の「天」の音注が「天帝」であることをうまく解釈できるでしょう。

ところで日本語の「日」には「太陽」と「日」（昼夜や日数としての日）の両義がみられます。そこで日本寄語の第1・2・3項の標目が「天・２（太陽）・日（昼）」であったと考えると、その音注はそれぞれ「１・天帝・虚路」と考えることができ、「天帝」は「太陽」（２）に対する音注であるとみることができるでしょう。

しかしこのように考えると問題もでてきます。なぜなら中日対訳語彙集における天文類の標目は現代にいたるまで「天・日・月・星…」の項目注38になっていて、標目２が脱落したとみることは難しいからです。

ところで浜田氏は音注「天帝」を天道の意とみることができればと次のように述べられています（浜田　昭和40.9：81）。

「1天　天帝　テン

（上略）従ってここも「天帝」をテンチとよんで「天地」の意と解すべきかと思われる。意味からはテンタウとよんで、「天道」の意にとれれば好都合であるが、「帝」をそうよむのはいささか無理であろう。」

＊初出論文「日本寄語解讀試案」（1951年：注4のA1）には上の下線の文章はありません。

＊吾妻鏡補（1815年）：「天　天道」（京大國語學国文學研編　昭和43：73）。

このように浜田氏は「」と「」の音の違いが大きいとして、「天帝」を「天道」とみることを断念されました。

ところで先に「天帝」は「太陽」（２）に対する音注と考えました。そこで標目「天・太陽・日」に何らかの混交が生じたと考え、標目第1項の「天」を「お天道様」（太陽）と考えてみます。

この考えは次のように示すことができるでしょう。

第1項　　 　　　　　　第2項　　　第3項　　 第4項

標目：天＝＝＝お天道様（太陽）　 日（昼）　　月　　　　 星

|　　　　|　　　 　　　　　|　　　　　 |　　　　　 |

音注：天（空）/天帝（太陽）　　　虚路（日）　禿計（月）　付泥（星）

＊日本風土記は「天　同音又所頼/天帝」。

そこで標目第1項の右の「太陽」（先に考えた標目の２）を「天道」、その音注を「天帝」とみれば、中国語「天道」（天地自然の道理の意）には太陽の義はないのに、その音注「天帝」が太陽であることをうまく説明できるでしょう。つまり「天」（第1項の左）の音注を「天帝」（太陽）とした日本寄語の錯誤を、日本風土記は「天　同音又所頼」と正しく改め、「天帝」は不明の語として（あるいは音注者が「天」に太陽の意を認めたため）残したものと考えることができるでしょう。

1. 「ティダ」の語源を考える

前節では標目「天」を「太陽」（お天道様）とみれば、日本寄語の「天　天帝」をうまく解釈できると考えました。しかし浜田氏がいわれるように「天道」（呉音テンダウ、漢音テンタウ）の音注を「天帝」と考えれば、天道と天帝との音の違いが大きすぎることが問題となります。そこでこの問題を考えるために、「日本語による解釈が行はれてゐるが、まだ満足すべき定説の聞けないもの」（亀井　昭和48：119）として、よく知られている琉球語のティダ（太陽）の語源から考えることにします。

ティダは『おもろさうし』注39にみえるテダ注40にさかのぼり注41、古くはこの「テダ」を南洋語に関係づけるチダル説注42や「照ら」の変化とみる照ら説注43などがあります。その後、戦後になって、「ティダは天道にさかのぼる」という考えが注44・亀井注45両氏によって、ほぼ同時期に同じような考えがだされています。

そこで、はじめに上村氏の天道説を紹介するために、「太陽」を意味する琉球方言をみてみることにします。

首里方言には太陽を意味する語には次のようにヒとティダの二つ注46があります（国立国語研究所編　昭和51：233,518,521）。

「hwii①（名）㊀日。太陽（tiida）。また，日光。～nu kataɴcooɴ．日が傾いている。②日。昼間。～nu nagaku natooɴ．日が長くなった。➂日。こよみの上の日。（略）。」

「tiida⓪（名）太陽。お日さま。日輪。～ nu ʔagatooɴ．日が上っている。」

「tiɴ①（名）天。空。sura（空）は文語。（略）」

また「ティダ」の各方言形をみてみると、次のようになっています。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 与那国島 | 八重山 | 宮古 | 沖縄 | 奄美 |
| 地点不明 | 波照間島・石垣・宮良 | 大浦・友利・大神島・多良間島 | 奥武・糸満・久高島・辺土名 | 名瀬・喜界島志戸桶 |
| てぃだん  [tidaN∖] | ʃina/tida/ ʃịta | tida/tʃida/tita/  tida | tʃida/ti:ra/ṛira/  tira | tidaまたは tïda/tïda |

＊中本氏の音声記号（[　]）は略す。i,nはi,nの無声化母音（無声化記号「∘」は下線で代用）をあらわす。

＊与那国・宮古大神・多良間方言をのぞき、中本　1976：80,215,396（八重山）/263,263（宮古）/282,296,301,306（沖縄）/318,337（奄美）。

＊与那国方言：与那国方言辞典編集委員会編　2021：198。

＊大神・多良間方言：琉球大学沖縄文化研究所編　1968：35,35。

ところで上村氏は天道（呉音テンダウ・漢音テンタウ）→テダ（太陽）の変化を考えるためにはau→aの変化がおきている必要があると考えられ、首里方言に「saataa⓪（名）砂糖/kaca①（名）蚊帳」注47（国立国語研究所編　昭和51：452,299）がみられることに注目されました。

そして首里方言のau→aの変化から、次のように考えられました（上村　1998：336）。

「そうだとすれば「天道」という語も古く琉球語に入っては,まずtendaのような転訛をしたと推定しても,十分肯首できるはずである。そしてそのn音は脱落してtedaとなり,『おもろ』の中に愛用されたといえる。」

そして「按司」注48（君長の義）…アジ〔おもろ・組踊・首里〕（略）（改行）船頭…シードゥ〔沖縄〕（略）」（上書：336）などn音が脱落しているようにみえることから、次のように考えられました（同書：336）。

「これらの例は，古い時代からn音を忌避する傾向のあったことを物語るものである。したがって，「天道」がテダとなること（筆者注：「天道」→tenda→teda（→tida）の変化）はもはや疑いのないところである。」

このように天道からテダ（→ティダ注49）への音の変化は説明できるとされ、次に語義の問題を考察されました。

まず中国語「天・天道・天帝」の意味を漢和辞典と中国語辞典によってみてみると、次のようになっています。

『学研　漢和大字典』（藤堂編　昭和53：307-8,310,309）：

A1.「【天】テン　あめ　あま意味❶あめ。❷天❶にいます最高の神❸自然界すべて❹天命❺天子のこと❻夫に対する尊称❼仏の住む世界❽キリスト教では、神のいる所。❾〔俗〕日。➓略」

A2.「【天道】一テン/ドウ（ダウ）①天の道理。②天地を主宰する神。➂天の運行。④略二テン/トウ（タウ）〔国〕太陽。」

A3.「【天帝】テン/テイ①天の主宰者。造化の神。上帝。②星の名。帝星。」

『中日大辞典』（愛知大学中日大辞典編纂処編　1968：1402,1403,1403,1252）：

B1.「[天]tiān「①天空.そら.②一昼夜.③（一日のうちの）昼間.④季節.（略）」

B2.「[天道]tiāndào 天地自然の道理.」

B3.「[天帝]tiāndì⇒〔上shang帝②〕

B4.「[上帝]①状の帝王②＝〔天tiān帝〕〔上皇➂〕天帝.上帝.④（キリスト教の）天の神様.」。

また日本語の「天道」の意味は次のとおりです（日本大辞典刊行会編　昭和50：14巻361）。

「てん-どう…ダウ【天道】〘名〙（「てんとう」とも）①天地自然の道理。天の道。天理。（略）②天地を主宰する神。天帝。上帝。（略）➂（一般に「てんとう」）太陽。日輪。てんとうさま。（略）④天体の運行する道。天。空。天空（以下、日葡辞書の引用は略）⑤天上界（略）⑥仏語（略）」

また日葡辞書では次のようになっています（土井・森田・長南編訳　1980：643,644,647,647,225,225）。

「Ten.テン（天）　天空.（略）」

「Tendŏテンダゥ（天道）　天空の上,または空.」

「Tentŏテンタゥ（天道）　Tenno michi（天の道）天の道,すなわち,天の秩序と摂理と.（略）」

「Tenteiテンテイ（天帝）　tno micado.（天の帝）国王.¶また,デウス（Deos 神）.」

「Fi.ヒ（日）　太陽.（略）」

「Fi.ヒ（日）　日.（略）」

そこで上村氏は上のような辞書類などにみえる種々の語から、「天道」の読みや語義の違いに注意し、「太陽の義の「天道」は,天帝の義から派生したものと思われるが、（略）」（上村　1998：337）とみられました。

　そして上村氏は次のように考えられました注50（同書：338-9）。

「まず天道という語は天帝の義として,琉球方言に早い時代に入ったのであるが,その義から太陽の義が派生したため,ティントー（テントウ）という語形に天帝の義を,テダという語形には太陽の義を配分することになったということができる。あたかも室町末期にテントウ（神）とテンダウ（天）の対立があったように。」

このように上村氏は「天道」がティダにあると考えられたのですが、その考えには次のように多くの問題があります。

a.天道（呉音tendau/漢音tentau）の変化

天道はtendau/tentau→tenda/tenta→teda→tidaと変化したのか→注51。

b.漢語「道」（dau/tau）はau→aの変化を起こしたのか→注52。

c.首里方言はn音を忌避する傾向があったのか→注53。

＊音節末鼻音*N*については注54。

d．「お」（太陽）は「天道」の天帝の義から派生したのか→注55。

e．「天道」（天の道の義）が「お」に変化したというのは本当か→注56。

f．天道のアクセントからの村山氏の批判→注57。

ところで上村氏とほぼ同じころに、亀井氏も「ティダ」（太陽）の語源を漢語の「天道」にみる考えを発表されています。

そこで亀井氏が引用された「語音翻訳」注58にみえる対訳を次に紹介します（田中訳注　1991：401）。

「天 텬（thyən）　　　　 　　 　 日頭텬다（thyənta）

天陰了텬구모뎨（～ kumothyəi） 日頭上了텬다아ᇰ갇뎨（～ aŋkatthyəi）

天晴了텬파리뎨（～ pharithyəi）日頭落了텬다야ᄉᆞ며잇졔（～ ’jasʌmyə’iscyəi）

＊右項（日頭・日頭上了・日頭落了）は亀井氏、左項（天・天陰了・天晴了）とハングルは筆者補。

＊（　）内はハングルの転写。有気音は上付きのhで転写。

＊ᄉᆞ（sʌ）は現在のス（スの母音は平唇の）のような音注59。

＊寧波方言：「【日頭】＝〖太陽〗（略）」（湯・陳・呉編纂　1997：361）。

亀井氏は「日頭」（太陽）の諺注「텬다」（thyənta）から、「（略）こんにちのティダに最も近いかたちは、（Ⅲ；筆者注：[t(h)eda]）である。（略）一往、「語音翻訳」の諺注は、この（Ⅲ）のかたちに対応するものとしておく。」（亀井　昭和48：123）と考えられました。

そして「日・月」の言葉をめぐる考察注60、また「日」とテダ（太陽）の関係を考慮し、「天道」→teda→tidaの変化を想定できるとして、次のように考えられました（亀井　昭和48：138）。

「（上略）以上に述べた事実や推論やを背景として琉球語ティダに対しわたくしの仮定するところは、（Ⅰ）これは、日本本土からふるくに流入したものであらう、（Ⅱ）けだし、その語源は、漢字で「天道」と書かれるかたちにひきあてられるものであらう、この二つである。」

このように亀井氏もティダの語源を天道とみられたのですが、両氏の天道説には共通する問題点があります。たとえば天道は日葡辞書では先に引用したように「Tendŏテンダゥ」は「空」、「Tentŏテンタゥ」は「天の道」の意であり、太陽の意はみられません 。また「天」に「天帝」（＝上帝）の義はありますが、その天帝にも太陽の意はありません。また日葡辞書には「」はみられず、天道の義の一つであるから太陽の意が派生し、天道が御天道様（＝太陽）として使われるようになったと考えることは難しいでしょう。そしてそれ以上にとの音には大きな違いがあり、テンタウ（天道）がテンテイ（天帝：太陽の意が派生）に変化したと考えることはさらに難しいでしょう。

ごく簡単に天道説の成り立ちがたいことを述べてみましたが、ここで上村氏と亀井氏の天道説の違いがよくわかる、亀井氏の次の言葉をみてみます（亀井　昭和48：138-9）。

「《ティダ》と《天道》とのできるだけ厳密なひきあてがこころみられなければならない。（略）しかるに、資料の関係で、室町時代にまでさかのぼると、それが《テンタウ》であったか《テンダウ》であったか不明である。（略）」

　このようにティダの語源とみられる「天道」にたいして、亀井氏は「《テンタウ》であったか《テンダウ》であったか不明」と考えられたので、両氏の結論は次のように異っています（上村　1998：337/亀井　昭和48：148）。

上村氏：

「（上略）琉球方言における太陽を意味するテダ語群は，国語の「天道」という語に起源があることが，音韻上も意味上も実証できたと信じる。（略）」

亀井氏：

「（略）《ティダ》の語源は、《天道（と、漢字をもって書くところの語）》に求むべきであらうと、さう、推定する。」

先に指摘したようにティダの語源を天道とするには多くの問題があり、「音韻上も意味上も実証できたと信じる」とされた上村氏より、「天道に求むべきであらうと、さう、推定する」とされた亀井氏のほうが論として優れているでしょう。

10.「ティダ」（太陽）は天道にさかのぼるか

ここからは「ティダ（太陽）は天道にさかのぼる」という天道説の可否を考えていくことにします。

まず語音翻訳と日本寄語・日本風土記の「天・日・月」の音注を次に比較してみます。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 語音翻訳  （1501年） | 標目語（音注） | | 寧波方言 |
| 日本寄語 | 日本風土記 |
| 第1項 | 天thyən | 天（天） | 天帝（同音又所頼/天帝） | 天河｟銀河｠ |
| 日頭thyənta | 日頭｟太陽｠  日日｟毎日｠ |
| 第2項 | - | 日（日） | （和虚） |
| 第3項 | 這月koro cɐki | 月（月） | （紫氣） | 月｟月:12ヵ月｠ |

＊語音翻訳：田中訳注　1991：285-7,401-2。-記号は省略。有気音はhで代用。

＊日本寄語（1523刊）：京大國語學國文學研編　昭和40.9：影印15上。

＊日本風土記（1592刊）：京大国語学国文学研編　昭和36：影印59下。

＊寧波方言：「天河（thi ɦəu）・日頭（ȵiɪʔ dœʏ）・日日（ȵiɪʔ ȵiɪʔ）・月（ɦyəʔ）」（湯・陳・呉編纂　1997：20,361,362,369）。｟　｠内は日本語の意味。

＊cɐki（＝tski）の母音ɐは注59の母音ʌに同じ。

ところで前節では日本寄語の標目「天」は天ではなく太陽であったとみて、その音注を「天帝」とみる考えを紹介しました。そこで語音翻訳の「日頭」の音注がthyəntなので、thyəntaはthyən（天）＋ta（タ）と考えることができるでしょう。すると、日本寄語では「天」（＝太陽）の音注が「天帝」となっているので、「天帝」は「天□」（□はタと読める漢字）の誤りであった注61と考えることができるでしょう。そして「帝」（霽韻t(i)ei）のかわりにタと読める「帯」注62（泰韻tai）を考えると、「天帯」はtenta→tenta（n：前出鼻音、入りわたり鼻音）→tenda→teda→tida（あるいはtenda→tinda→tidaなど）の変化を考えることができるでしょう。

　そこで「天・帯・道・天道」の変化を次のように考えることができます。

上古　中古　　　　語音翻訳　 　日葡辞書　　拼音

天（山摂平声4等先韻透母）：then→then→thien→*thyən-------*→Ten-------→tiān

帯（蟹摂去声1等泰韻端母）：tad-→tai-------→*ta---*------→Tai--------→dài

道（效摂上声1等晧韻定母）：dog-→dau（呉音）/tau（漢音）→Dŏ---------→dào

天道　　　　　　　　　　　：thendog→thendau/thentau-----→Tendŏ/Tentŏ*-*→tiāndào

＊上古音・中古音・北京語（拼音）は藤堂編　昭和53：307,407,1328。次清音（有気音）はhで代用。

＊斜体ローマ字は語音翻訳（1501年）。*ta*は「天　thyən」と「日頭　thyənta」（太陽の意）の比較から推定。

＊日葡辞書（1603年刊）：土井・森田・長南編訳　1980：643,285,185,644,647。ただし、「帯」は「Fŭtai.フゥタイ（風帯）」で代用。

＊「天道」は「天」と「道」を単純に結合させたもの。日葡辞書のTendŏは「空」、Tentŏは「天の道」の意。

ところで日葡辞書の「天道」（Tendŏ/Tentŏ）は現在テントー（tento:）になっています。そこで語音翻訳のthyənta（日頭）を日本寄語の「」と同じとみて、（tentau）と（tenta）が同じテントーになったと考えれば、tentauとtentaが同音になったことで天道と天帯の意味が混交し、太陽の意味がなかった「」（天の道の義）が太陽の意味をもち、「お」（太陽）として使われるようになったと考えることができるでしょう。また語音翻訳のthyənta（太陽）はその後、tenta→tenda→teda（琉球方言テダ）と変化したとみることができるので、「テダ」の語源を天道とみることができるでしょう。

しかしここで問題があります。「」がテントー（tento:）に変化したことを認めるとしても、「」（tenta）がテントーに変化することは考えにくく、両者がともにテントーになって音義混交したと考えることには無理があるでしょう。そこでこのテンタ（tenta：텬다・天帯）とテンタウ（tentau：天道）の両者が同じテントーになり音義混交するために、テンタは単なるtentaではなく、語尾のタ（ta）は微妙な音XをもったtentaX注63であったと考えなおしてみます。そしてそのtentaXのXは語音翻訳（1501年）時代にはハングルでは表わせない音であったと考えれば、tentaXであった音を語音翻訳では텬다、また同時代の日本寄語では「」と音注していることに問題はなくなるでしょう。そしてtentaX（≒tenta：텬다・天帯）→tento：、またtentau（天道）→tento：の変化を考えれば、テンタ（天帯＝太陽）とテンタウ（天道＝お天道様）が混交し（同音となり）、「天道」に太陽（＝お天道様）の意が生じたと説明できるでしょう。

このようなテンタ（太陽）とテンタウ（天道）の関係は次のように考えることができるでしょう。

16世紀　　17世紀　　　　　　　　　　　　現在

本土方言：tentau（天道：天の道）→tentŏ→tento:-----------------「お天道様」

　　　　　　　　　　　　　　↗（tento:に変わることで、天道に太陽の義が出現）

　　　　　　tentaX（太陽）＝tenta（天帯：日本寄語の「天」の音注）

　　　　　　　　　　　↘（16世紀以前、本土より流入）

琉球方言：　　　　　　tenta（語音翻訳:텬다）→tenta→tenda→teda→tida（太陽）

＊tentaX（太陽）は語音翻訳の「日頭텬다」（thyənta：太陽の意）から推定。

＊日本寄語（1523年初梓：「天　天帝」）、語音翻訳（1501年：「日頭텬다」）、日葡辞書（1603年：「tentŏ　天の道の意」）から、tento:に変った時期を16・17世紀注64としてあります。

＊tidaの琉球各方言形はとりあえずtidaとしてあります。

11.텬/텬다（天と太陽）の関係をどう考えるか

ここからは語音翻訳「天　텬」と「日頭　텬다」の関係を考えることにします。

まず日本寄語の「天　天帝」は「天　天帯」に改め、標目「天」は太陽の意、その音注は「天帯」（テンタ：太陽）とみます。

そこで日本寄語の「天帯」と語音翻訳の「텬다」を比較すると、次のようになるでしょう。

日本寄語：「」（太陽）　　　　＝「」　　　　＋「」

語音翻訳：텬다（日頭の音注：太陽）＝텬（天の音注）＋다（ta）

そこで「」に接辞「」（다：タ）が付加されているとみると、「」（텬다：日頭）は「天・にあるもの」、つまり太陽とみることができるでしょう。ではこのように考えた接辞タとは何でしょうか。

この問題を考えるために「・」のダを琉球語ティダと関係づける服部氏の考えを、村山氏の次の文章からみてみます（村山　1988：216-7）。

「さて，日本祖語に＊tai（または＊tee）という記号素（または単語）――その意味は《照るもの》であろう――があったとすると，それに対応する首里方言の形はA時代〔1400年ごろまで〕＊te：B時代以降＊ti：であったはずである。私は現代首里方言の/tiida/《太陽》の/tii/がこれであろうと思う（筆者注：tiiを日本祖語の「照るもの」の意とみる）。そうだとすれば/da/は接尾辞である。これは《灘》（万葉集3893），《間》注65（万葉集3571）の-daと同じ記号素ではなかろうか。

　また

　　《果》（和名抄）

　　《畜》（和名抄）

などの-da注66も同じ記号素ではなかろうか。（中略）従って『ケダモノ』の日本祖語形は ＊kaida-mə-nəだということになる。」

そこで服部氏はtii-daを「照るもの・処」（上書：219）と考えておられると村山氏は考えて、次のように批判されました（同書：220）。

「（上略）「毛の（生えている）物」ならわかるが，「毛・処・物」が「畜」を表わすと見ることは無理ではあるまいか。イ）の「照るもの・処」（筆者注：tii・da）を「太陽」をあらわす語の構成だと見ることも無理のようである。」

上の村山氏の批判は当たっていて、「《畜》」（獣：毛ノもの）の

ダは連体格助詞ナ（ノ）の転とみてよいでしょう。

そこで連体格助詞ノと対になっている連体格助詞ナ（湊：ナ)の存在か

ら、同じく「毛ダもの」（獣）のダと対になるドの方言例として、村山氏は次のような語例をあげられています（上書：221-3）。

A.八丈島方言：「2）ハナ**ドー**　ゴンダラ　花のようだ」

B.鹿児島方言：「アスノバン**ドマ**明日の晩**ドマ」**

＊村山氏の考え：「ドマは「の」からの変化ではあるまいか。」(上書：222)。

C.琉球方言（『混効験集』）：「けおのあけ**どま**に　けおの朝立ちに（略）」

＊村山氏の考え：「これも上記の鹿児島方言のドマ（＜…の）と同じく，「明けの

に」ではあるまいか。」(同書：222)。

＊『混効験集』に、「一けおのあけとまに　坤・言語（改行）原注　今日の曙事を申也　同御双紙に有之（略）」（外間　2002：89）。

D.『「レクシコン」改編による南部方言辞典』（アンドレイ・タターリノ編による、18

世紀下北半島方言）:「donda mono　とんたもの　ドンダ　モノ　愚かな者(鈍ダ者)

　会13」（村山　昭和40：161）。

そこで村山氏は接辞ダと対になるドの存在を次のように考えられました（村山　1988：223）。

「（上略）**ケダモノ，クダモノのダとをなすドが存在しない，と見る必要はまママるまい**。ドは，北は下北半島の方言から南は沖縄本島の琉球方言にいたるまで，存在する。

　シ＝シのムナmunaからが生まれたのもmunaのナの前にムがあることと無関係ではない。古代語タダムキ注67（ひじから手首までの部分をさす，と見られている）はナ・ムキ（＝手のおもて。ナ・ウラに対す）に由来するであろう。ナの次にmukiがあるためにナがダに変わったのであろう。」

そこで連体格助詞ノ・ナと対をなすド・ダとの関係は次のようになるでしょう。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 連体格助詞（ナ・ノ） | ド・ダ |
| 母音オ | 水面：ノ（＝） | アスノバンドマ（明日の晩の間：鹿児島方言） |
| 母音ア | 湊：水ナ門 | 獣：毛ダもの |

そこで接辞タ・ダ・ラとナの例を次にみてみます。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| タ | ダ | ラ | ナ |
| (太陽)// | /・/ | （咲くラ）/カブラ/赤ら |  |

＊赤田・黒田は地名（人名）にみられます。

＊「Axida．アシダ（足駄）　木履,または足駄原注1」「Xeqida．セキダ（席駄）　竹の

皮で作った草履1）（略）」（土井・森田・長南編訳　1980：41, 754）。

＊カブラ（鏑・蕪）：「△カブロ〔自リ二一至二於一( 一三・335)〕（改行）カブは、カブツチ・カブラなどの語基であり、コブとも通じて、まるいかたまりを意味し、

とくに頭を意味する。（略）」（阪倉　昭和41：318）。

＊「アカラ小舟〔赤羅小舟（萬葉・三八六八）〕」（同書：313）。

上の地名「赤田」や「黒田」などの「赤・黒」を形容詞とみて、「赤い田」や「黒い田」とみることはできないでしょう。そこでこの地名「赤田」や「黒田」の「」は「」（天にあるもの＝太陽）や「」（円いもの）と同じ接辞（接尾語）とみて、「赤田・黒田」は「赤いもの・黒いもの」（地名、さらに人名に転）とみるのがよいでしょう。そうみれば「・・カブラ（蕪・鏑）・赤ら」も「足（に履く）もの・咲くもの・カブ（の転）のようなもの・赤い（状態の）ところ」と考えることができるでしょう。そしてこのような接尾語のタは古くから「（海）・・なタ・こきタ　など」（阪倉　平成2：297）にみられるので、接尾語タは情態性をあらわす「～のようなもの（こと・ところ）」と考えることに無理はないでしょう。

また同じように接頭語のタは「名詞・副詞・動詞・形容詞に冠して用いられ」（上代語辞典編修委員会編　1967：408）、「タ走る＜動詞＞・タ遠し＜形容詞＞・タ平＜情態言＞・タ＜同上＞」（上書：301）などとみられます。

たとえば接尾語注68と接頭語注69の例を次に少しみてみます。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | ラ | ヤ | マ | カ | サ | タ |
| 接尾語 | ら | くや |  |  | サ |  |
| 接頭語 | － | － | 麻く | 青なる | 遠し | 多遠み |

このように上の接尾語を情態言（「～のようなもの（こと・ところ）」を作る接辞とみても、接頭語はその意味がまったく判然としません。しかし総合的にみれば、これらのマ・カ・サ・タ（タには判然としない意味への記載はなし；同書：408）の「接頭語と接尾語は、本来性状を表わす表現に、ある主観的な色合いを添えるものではなかったかとも考えられる。」（同書：170）でしょう。

このように接尾語はまだしも接頭語の意味は判然としませんが、古代の接頭語カ注70・タなどをオーストロネシア語族の接辞＊kaや＊ta（ɴ）と結びつけた人

に川本氏がいます。

川本氏の考えを次に紹介します（川本　昭和55：83）。

「現代語「タンコブ」（筆者注：たん瘤）は、南祖（筆者注：オーストロネシア祖語）\*taŋ-からきたと思われる唯一の例だ注71。カがコになったのと並行して、タもトになった。

マドフ（惑）ー→トマドフ

キレル（切）ー→トギレル

（略）現在とくに関西地方でさかんな「ド」（筆者注：「ド阿保」）も、あるいは同じ系統の接頭辞かも知れない。」

そこで川本氏は次のようにいわれます（上書：84）。

「だが、タとカ、トとコのばあいは違う。少なくとも過去においては、奈良時代には生きて機能していたし、一部は現在でも生きて働いている。この事実は否定できまい。南島的接頭辞（筆者注：オーストロネシア祖語の接頭辞\*ka,\*taɴなど）は、いまもなお日本語の中に生きているのだ。」

日本語の接辞（接頭語・接尾語）をオーストロネシア祖語の接頭辞注72と関係づけるためには考えるべきことが多くありますが、ここでは問題を提起するだけで、今回の更新はここまでとします。

12.おわりに

今回は予定していなかった「天　天帝」の解読を急遽のせることにしました。浜田氏が「日本寄語解読試案」で「天」の音注「天帝」を「「天道」の意にとれれば好都合であるが、「帝」をそう読むのはいささか無理であろう。」（浜田　昭和40.9：81）と述べられています。そこで「天」の音注を「天道」（つまり太陽）とみて、「」注73との音の違いを解消させるために、「天帝」を字形の類似する「」に改めるアイディアが昨年暮れ浮かびました。

そして「日」が太陽と日の両義をもつことから、標目の「天」は「太陽」を示していると考えるに至ったのですが、日本寄語の「天」（＝太陽）の音注がなぜ「」（「天帝」を改める）であるのかについては考えがうかばず、そのままになっていました。しかし5月に亀井氏の「ティダの語源」を読みなおし、語音翻訳に「日頭」（太陽）の音注が텬다（テンタ）となっていることから、「」を「（텬）（다）」とみることができることに気づきました注61。そこでこのタ（/다）を接辞（接尾語タ）とみて、以前から考えていたことを少々書いてみました。

今回も更新が延び、またタなどの接辞とオーストロネシア祖語との関係も糸口だけを書いてみました。次回は撥音の問題を考察したいと思っています。

2023.9.22　　　ichhan

【注】

1. 『日本（国）考略』（薛俊編述）の初梓本（1523年鄭余慶上梓、1530年王文光重刊）は存在せず。またそのなかの「寄語略」は「日本寄語」といわれる。

「〇寄語畧　寄。即譯也。西北曰譯。東南曰寄。」（京大國語學國文学研編　昭和40.9：影印15上）とみえ、馬氏によれば「（上略）中国史料における「寄語」「寄音」というのは、狭義では写音のことと解釈することができる。」（馬　2015：23）。

1. 『鶴林玉露』（京大國語學國文學研編：昭和43：163；注34）。

『書史會要』（京大國語學國文學研編：昭和40.7：73-4；注35）。

＊「「鎌倉最初期（筆者注：鎌倉時代は12世紀末 ～1333年）の日本僧安覺（備中の人）の發音を南宋人羅大經（江西省盧陵の人）が漢字で音譯した例が、鶴林玉露人集巻四に出てゐる。（略）次に、元末明初の人陶宗儀（浙江省黄巖の人）は、書史會要巻八の中に、日本僧克全大用（傳未詳）から敎はった「いろは」の讀み方を記してゐる。」（有坂　昭和32：214）。

1. 当時の日本語研究書には次のものがあります。

A．『日本館訳語』：編者不詳、1492-1549年のころ刊。「華夷訳語」の丙種本の一で、他に『朝鮮館訳語』や『琉球館訳語』などあり。北方方言（官話）による中国語日本語対訳語彙集。

B．『日本一鑑』：1565-66年新安郡人鄭舜功著。そのなかの「窮河話海」の巻五に「寄語」（対訳）がある。

＊「神戸、丁の指摘が正確（筆者注：新安郡は安徽の徽州府）で」（馬　2015：8）、「『日本一鑑』の所拠方言は徽州方言（筆者注：10大方言中の徽語とも）である可能性が高いと言えよう。」（同書：10）と、馬氏は考えられています。

C1.『全浙兵制考』：1592年江蘇金山衛人侯継高撰。金山衛は当時松江府、現在は上海市金山区に属す。その附録に『日本風土記』があり、その巻之四「語音」に「切音正舌歌」、その後に「天文」以下の中国語日本語対訳語あり。

＊「我われは（筆者補：日本風土記の）原撰者が寧波の文人である可能性を大胆に思うのである。」（松本・丁　1998：184）。

C2.『日本考』：1592年李言恭・郝杰上梓。

＊これはC1の「日本風土記」をほぼ同一のまま出版したもので、下記の渡辺氏の訳書があります。

a. 『譯註日本考』(大東選書（一）：渡邊三男　昭和18　大東出版社)。

b. 『新修訳註日本考』(新典社叢書13：渡辺三男　昭和60　新典社)。

＊bはaに「「解説」追考」（福島邦道）を補遺し、再版したもの。

1. 浜田敦氏：

A1.「日本寄語解讀試案」（大阪市立大學法文學紀要『人文研究』（2巻1号）：濱田　1951）。

＊これは「十年以上も持ち古した学生時代蒐集の資料をそのまま使用し」（浜田　昭和40.9：80）、「補訂した」（濱田　1951：19）もの。

A2.「日本寄語解読試案」『日本寄語の研究』（浜田　昭和40.9）。

＊「なお、内容については特に福島邦道氏の御教示に従って改めた点が多い。」（同書：80）とあります。

B.大友信一氏：『室町時代の国語音声の研究』（大友　昭和38　至文堂）。

C.馬之濤氏：「明代中国史料による室町時代の音韻についての研究―『日本国考略』を中心に―」（早稲田大学博士論文：馬　2015）。

D.福島邦道氏：「「日本寄語」語解」『国語学』（36輯；福島　昭和34.3）。

「上」に寄語略の20数語の新しい解読がみられ、また「下」には「一、オ段長音の開合について」「二、鼻濁音について」の考察のなかで、数語の解釈あり。

1. 北方方言（官話系）と南方方言（呉方言）との違い（馬　2015：7）：

「北方方言の反映

微母の半母音化：（改行）　文（ウ）、万（ワン）

疑母と影母の合流原注5：（改行）　吾＝倭（オ）、敖＝倭（ワウ）

濁音の清音化：（改行）　傑＝急（ゲ）、読＝都（ツ）

入声の消失：（改行）　約＝容（ヨ）、各＝稿（カウ）

呉方言の反映

蟹摂二等i韻尾の脱落（改行）　揩（カ）、挨（ア）

匣母の弱化（改行）　河（オ）、下（ヨウ）

假摂の母音がオ段にも読まれる（改行）　麻（モ）、沙（ソ）

日母、疑母と泥母の混同（改行）　尓＝宜＝尼（ニ）

全濁の保持（改行）　大（ド）、助（ヅ）原注6」

1. 「1.4 呉語可分爲六個片：太湖片,台州片,甌江片,婺州片,處衢片,宣州片。太湖片又可分爲毗陵、蘇■嘉、苕溪、杭州、𦣪紹、甬江等六個小片。」（傅　2010：1）。

＊■字は「サンズイ（氵）に扈」の字の代用。

＊「片」：「❷指較大地區内分的較小地區」（杭州方言；鮑編　1998：1）。

＊太湖片：一部江蘇省南部（常州市、南通市）、浙江省（蘇州市・上海市・嘉興

市、湖州市、杭州市、紹興市、寧波市・舟山市）など。台州片は台州市、甌江片は温州市、婺州片は金華市、處衢片は麗水市・衢州市、宣州片は建徳市（宣語）など。呉語方言分区図は傅　2010：2より。

＊詹氏は呉方言を南北二つの下位方言（江浙方言と浙南呉語）にわけ、江浙方言は江蘇省の南部・浙江省の蘇州話・上海語など、また浙南呉語は浙江の中部（紹興話）と南部（平陽話：温州地区）に分布するとされています（詹　昭和58：147-9）。

1. 「（略）編纂状況に合うことはもちろん、呉方言の下位諸方言のなかで、以上の音声的特徴（筆者注：清・濁声母の違いの保持など）に最も符合するのが寧波方言であった。台州方言にも同様の特徴が観察された。およそ百年時代を遡れば、台州方言と寧波方言の間に大差はなかったと考えられる。」（馬　2015：39-40）。

＊舟山市：浙江省の地級市で寧波市に隣接（傅　2010：2）。甬江はおおむね現在の寧波市と舟山市の地域をさしている。舟山はもともと寧波市の管轄下にあり、明代洪武の初期においても寧波府の所轄原注5であったため、甬江方言を本論文では便宜上、寧波方言と呼ぶことにする。」（馬　2015：36）。

1. 異本にみられる表記（大友　昭和38：119）。

「103主人　「」「」「」

ハ　**得古**牀

ニ　**内**呆**得**果**古**泉

ホ　**日籌登武**朶」

＊得：「叢書集成」所収得月簃叢書本。古：東北大学蔵光緒刊「欽定古今図書集成」所収本。内：内閣文庫蔵写本。日：静嘉堂文庫蔵重鐫（「日本図纂」）本。籌：静嘉堂文庫蔵嘉靖（「筹海図編」）本。登：内閣文庫蔵明刊（「登壇必究」）本。武：内閣文庫蔵天啓（「武備志」）本（以上、同書：112より）。

＊「牀・呆・果・泉・朵（朶に同じ）」の寧波音は「z,ŋe,kəu,dzʏ,to」（湯・陳・呉編纂　1997：236,127,185,151,97）。

1. A.『吾妻鏡補』（1815年版行）：

江蘇呉江の平望生まれの翁広平撰。その「国語解」（『海外奇談』によるという）に中国語・日本語対訳語彙が記載されている。天文時令類に「晴　」（形容詞カ語尾）や房屋類に「唐人公舘　式吉」（長崎市内；京大國語學國文學研編　昭和43：73,78）などがみられます。ルビは筆者。

B.『東語簡要』（1884年上梓）：

玉燕（出身不明）著。「作者が上海にいた関係で、南の方の中国方音によるとよく解読できるのであり、光緒時代初期における中国人の耳にした日本語の実態をうかがうべき恰好の資料と言えるのである。」（福島　昭和43：241）。

C.『東語入門』（1895年刊）：

浙江省海塩県（旧銭塘道内）の人、陳天麒編著。「明治初期東京に在住した中国人の収録した日本語という点からもはなはだ注意すべき資料である。（略）清朝における中国人の日本語研究の掉尾を飾るものと言えるのである。」(同書：244-5）。

1. A.日本国語大辞典：日本大辞典刊行会編　昭和51：20巻706。

「わん-ぱち【忘八・王八】〘名〙①中国で鼈（すっぽん）の称。②（鼈は「仁義孝悌忠信簾恥」の八徳を忘れたものの意）人をののしっていう語。人非人。又、わるがしこい者。わんぱち。（略）＊随筆・隣女晤言-二＜略＞此忘八の唐音わんはなり」（略）➂遊女屋の主人。くつわ。」

B. 寧波方言詞典：湯・陳・呉編纂　1997：242,51。

【王八】⇒〖乌龟〗

【乌龟】＝〖王八〗❶爬行动物（略）❷譏稱妻子有外遇的人❸舊时指妓院中老鸨的男❹詈语‖“八”音〔pa〕，韵、调特殊，僅限於此條）」　＊声調記号は略。

　＊「271老鴇　」（吾妻鏡補；大友・木村編　昭和47a：15）。

1. 『岩波日中辞典』と『日葡辞書』では次のようになっています。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 日本語 | 語義 | 『岩波日中辞典』の中国語の訳語 | 日葡辞書 |
| 主人 | 1雇主 | 雇主，主人，主子 | Xujin（主人） |
| 店主 | 老板，掌柜，東家 |
| 2戸主 | 当家的，家長，家主 |
| 3夫 | 丈夫，主人，愛人 |
| 4（客に対して） | 主人，東道，東道主 |
| 旦那 | 1あるじ | 主人，東家，老爺，老板 | Danna（檀那） |
| 2夫 | 丈夫，愛人，男人，先生 |
| 3（年輩の男性） | 先生，老爺，大人 |
| 亭主 | 1あるじ | 主人，老板，東家，店東，店家 | Teixu（亭主） |
| 2夫 | 丈夫，漢子 |
| あるじ | （家の）あるじ | 当家的，家長，家主 | Aruji（主） |
| （店の）あるじ | 老板，東家，掌柜，掌柜的，店東，店家 |
| ぬし | 特別な語は見られない。 | | Nuxi（主） |

＊岩波日中辞典：倉石・折敷瀬編　1983：509—10,685,745,43,865。

＊日葡辞書：土井・森田・長南編訳　1980：801,181,643,33,478。

＊Nuxi.ヌシ（主）　物の持ち主，主人，あるいは，女主人．」「Nuxi.ヌシ（主）身分の低い者に対して言う語で，‘お前，そなた’の意．」（土井・森田・長南編訳　1980：478,478）。

＊Aruji.主（主）　主人，女主人，または，物の持ち主．」（同書：33）。

1. 「〔東家〕dōng・jiā＝〔東人〕〔東主①〕①（旧時，商店・中小企業の）資本主・

出資者．②旧時，（店員・雇い人に対する）主人．→〔西xī家②〕」（倉石・折敷瀬編　1983：354）。

1. 「日本風土記」（語音：巻三）の「以路法四十八字様音注清濁變用」のなかの日本歌謡第13首目「樵子偸桃」に「春の山人」（春那山人）とあり、その呼音に「櫻索古頼春發而山陽脉人許多」、釋音に「櫻正音春山人正音」（京大国語学国文学研編　昭和36：影印

44下）とみえます。

1. 『日本図纂』（明の鄭若曾撰、1561年序）：「日本紀略や寄語島名のごとき新資料を編しながら、日本語のみは、寄語雜類として日本考略（筆者注：「日本寄語」）のものを襲録してしまっているのである。（略）」（福島　昭和40.9：42）。
2. 「～な」という珍しい音注は日本風土記に「無禮人　■乃許多　かいな人」「作怪人　虱子乃/木那　しけママな物」「罪人　罪乃/木那　又禿■人　ものママ」（京大国語国文学研編　昭和36：影印64上,64上,66上；■は手偏に解の字）がみられても、「シケな者/シケの者」は日本国語大辞典や日葡辞書にはみられません。「かいな人」は「な人」か。文明本節用集「赦レ罪　ザイヲユルス」」（日本大辞典刊行会編　昭和49：8巻535）。

＊中国語「作怪」は「①やたらにさわぐ.じゃまをする.変なまねをする. （略）②奇怪なこと.おかしなこと.（略）」(愛知大学中日大辞典編纂処編　1968：1941)。「シズナモノ。作怪人は騙者、或は奇怪な風體の者をいふ」（渡辺　昭和60：239）。「「作怪人」は風体の賤しい者を意味するので、賤な者と考える。」（大友　昭和38：524上）。

＊「虱」：「瑟」と同音、櫛韻「ṣïět」（藤堂・小林　昭和46：59）。「子」：止韻「tsiei」（同書：41）。

1. 日本寄語では「乃」は「185.哭　乃古（ナク）」、また唯一例「330.九　个个乃子（ココノツ）」、「木」は「278.綿布　木綿（モメン）」（馬　2015：71,89,82）。また「那」（歌韻na）は「155.飲　那慕（ノム）」（同書：67）。日本風土記の「」は注21。

＊寧波方言「乃・木・那」：「nɛ/moʔ/na」（湯・陳・呉編纂　1997：139,334,引論10）。

1. このときまでは「山家」の読み、ヤマカに気をとられていたため、「床杲」を「床家」に改め、サンカと読む考えにはいたりませんでした。しかし「家」を「杲・呆・果」などと誤まることがあるかは疑問で、「床杲」を「床家」の誤りとみることは無理では。
2. A．『日本国語大辞典』（日本大辞典刊行会編　昭和49：9巻201,260/同書　昭和51：19巻545,548,573）。

「さん-か【山家】〘名〙山中の家。やまが。（略）」

「さん-じん【山人】〘名〙山中に住む人。また、俗世間を離れて山中に隠棲（いんせい）する人。隠者。仙人。（略）」

「やま-が【山家】〘名〙①山にある家。山中の家。山里の家。（略）」

「やまが-もの【山家者】〘名〙①山家育ちの人。山家に住む人。山里びと。山がつ（略）」

「やま-びと【山人】〘名〙①山に住む人。杣人（そまびと）・炭焼きなど、山で働く人。（略）②仙人（略）」

B. 『日葡辞書』（土井・森田・長南編訳　1980：553,555,808,808,808）。

「Sanca.サンカ（山家）　Yamano iye.（山の家）山中の家,または,野原の中にある家.文書語.」

「Sanjin.サンジン（山人）Yamabito（山人）山の仕事をする人,または,山中に住んでいる人.文書語.」

「Yamabito.ヤマビト（山人）　山林で薪を切る人.¶また,シナの山林や人里離れた所に隠れ住んでいて，不思議な事を行なうと思われている人々.」

「Yamaga.ヤマガ（山家）　山の中にある家，卑語．」

「Yamagatcu.ヤマガツ（山賤）　身分の卑しい人,または,山林で育った人.」

1. 「山人　床杲」（□は那の脱字：～な者）とも考えることができますが、以下（本文）の考察には影響しないので、「床杲木乃」（～者）として考察します。
2. 「仮摂二等字の再構音は「沙茶」[ɔ]、「花挂」[uɔ]である。『日本国考略』ではア段とオ段に用いられている。（略）」（馬　2015：100）。「255.碟　晒頼（サラ）/沙頼（サラ）」「290.醤　弥沙（ミソ）」（同書：80,84）。

＊遇摂と果摂にたいする馬氏の考えは次のとおり（同書：101-2）。

「【原表5】（ア行のみ、カ行以下は省略）

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | ウ段 | | オ段 | |
| 遇摂 | 果摂 | 遇摂 | 果摂 |
| ア行 | 15 | 2 | 5 | 36 |

このように、ウ段を表わすには遇摂、オ段を表わすには果摂の字を使う明らかな傾向があると言える。（中略）おそらく16世紀の呉方言の全地域において遇摂と果摂の区別ははっきりしていたと考えられる。」

1. 日本風土記には「門子　課/木那　小物」（京大国語学国文学研編　昭和36：影印64下）がみられます。『雅俗漢語譯解』には「門子（略）〔陶山冕云〕小姓のこと也。所により門番をもいふ。」（佐伯編　昭和51：249）。

＊「その（筆者注：上書の）内容から見て、これが江戸時代における唐話學最盛期の成績を，いはば辭書の形に集大成したものであることは疑ひない。」（同書：解題1）。

1. 亀井氏は「八咫烏はなんと鳴いたか」の論文（亀井　昭和59：423-436）のなかで、日本書紀（神武天皇の項）に「からすのなきごゑにかけた帰順へののことば」として「怡奘過怡奘過」があり、その割注に「過音倭」とあることを紹介されています。そして原文「過」によれば八咫烏の鳴き声は「イザクヮイザクヮ」であるが、その音注が「倭」であることから「イザワイザワ」と読むべきであると注意され、この不思議な音注「過音倭」について詳細に考察されています。

＊「前漢書の地理志（筆者未見）の記事として、（略）「倭」を「音渦」としてゐるのをみいだしたことである。（略）（「戦争のにまきこまれる」などいった場合の「渦」を「クヮ」とするのは、いはば、日本における、百姓よみといふべきである。）」（同書：436）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 韻鏡（果摂） | 拼音 | 寧波方言 |
| 過 | 去声過韻見母kua/平声戈韻見母kua | guò, guō | kəu |
| 倭窩 | 平声戈韻影母ʔua | wō | əu,əu |
| 渦 | 平声戈韻影母ʔua/平声戈韻見母kua | wō,guō | - |
| 和 | 平声戈韻匣母ɦua/去声過韻匣母ɦua | hé,hè,huó,huò,huo,hú | ɦu,ɦəu |

＊日本寄語：「146.怕　倭踈路路（オソルル）」（馬　2015：65）。

＊書史會要（1376年刊）：「を窩」「お和又近/窩」（京大國語學國文学研編　昭和40.7：影印73,73）

＊「【窩】25579　ワ　〔韻會〕烏禾切-ㄨㄛ　˳歌wo1（略）」（諸橋　昭和42縮寫版：8巻671）。

＊寧波方言（声調は略）：湯・陳・語編纂　1997：186,191,191,-,50,190。

1. 果摂見・渓母は韻鏡で次のようになっています。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 果摂 | 見母（k）　　　寧波方言 | 渓母（kh）　　　寧波方言 |
| 平声戈韻 | 戈（kua）クワ　- | 科（khua）クワ　khəu |
| 上声果韻 | 果（kua）クワ　kəu | 顆（khua）クワ　- |
| 去声過韻 | 過（kua）クワ　kəu | 課（khua）クワ　khəu |

＊（　）内のロ－マ字は韻鏡（藤堂・小林　昭和46：80）による。呉・漢音は同じ。

＊寧波方言：湯・陳・呉編纂　1997：-,185,185,187,-,187。寧波方言に2音あるもの（「家　tɕia/ko」；上書：69,102）はそのうちの1音のみをしめしてあります。

1. A.漢音：「佐・沙」は「サ/サシャ）」（佐藤・濱口編　2018：84,804）。

B.鶴林玉露（1248-52年）：「酒ヲ曰フ二一ト」（京大國語學國文學研編　昭和43：影印163下）。

C.書史会要：「さ篩又近/柴」「を窩」「お和又近/窩」（京大國語學國文學研編　昭和40.7：影印73,73,73）。 ＊「篩・蒒」は「師」（止摂脂韻2等ṣïi）と同音（陳重修　民国80：52）。

D.日本寄語：「255.碟　晒頼（サラ）/沙頼（サラ）」「343.小　發蒒」（ホソイ）」「351.朽　骨蒒路（クサル）」「363.臭　骨蒒水」（クサシ）」（馬　2015：80,90,91,93）。

＊「碟」は「小さな皿」（佐藤・濱口編　2018：1020）。「楪」は「底が平らで浅い、やや小ぶりの皿」（同書：748）。

E.日本風土記：「申　沙魯　さる」「刀筲　殺耶　さや」「課命士　三和吉　さんおき（筆者注：算置）」「花椒　 山小　サンセウ」（京大国語学国文学研編　昭和36：影印61下,72下,65上,69下）。また『日本考』では「名づけて「」（譯註、酒宴）といふ。」「路　/讃（山奴計）」（渡辺　昭和60：133,61）。

F.日葡辞書：「Safachi.サハチ（沙鉢）」「San.サン（三）三」「Sanca.サンカ（山家）」「Saburocu.サブロク（三六）」（土井・森田・長南編訳　1980：548,552,

553,545）。

G.吾妻鏡補：「461酒　」「287捜子　」「9三月　」「290財副　」（大友・木村編　昭和47a：23,16,7,16）。

H.東語簡要：「479酒　」「52三月　」「214三十　」（同書：90,61,72）。

I.東語入門：「774酒　」「1070三　」（大友・木村編　昭和47b：37,50）。

J.寧波方言：「so,sɿ,sɐʔ,sɛ,sɛ」（湯・陳・呉編纂　1997：100,3,313,141,143）。

K.杭州方言：「sɑ,sɛ,sɑʔ,s,s」（鮑編纂　1998：62,80,280,174,175）。

L.日本館訳語：「楪　」（京大國語學國文學研編　昭和43：46上）。

M.弘治五年朝鮮版伊路波：「さ 音/사」（京大國語學國文學研編　昭和40.7：4）。

1. 「〈呉音〉の来歴は明らかでないが，六朝後期の南方音が百済を経て伝えられたものという。〈漢音〉はその後，長安を中心とする地方からもたらされた唐代の北方音である。〈唐音〉は宋以後，明清に至る各時代の主として南方音が伝えられたものの総称で，便宜的な呼称である。例えば同じ「行」字でも，呉音ではギャウ，漢音ではカウ，唐音ではアンと読まれる。（略）」（平山　昭和42：136）。

＊中国語呉方言については注5・6。

1. 「唐（618-907年）末に入唐した人々の伝えた漢字音のうちには，いわゆる〈漢音〉（筆者注：日本書紀720年の正音）よりもっと新しい中世的な傾向を思わせるものがあり，それを〈新漢音〉という。（略）「億土」‘イクト’　漢音なら「億」‘ヨク’（以下略）」（藤堂　1980：172）。
2. 鎌倉時代に伝えられた古臨済曹洞系唐音（筆者注：①中世唐音）と、江戸時代に黄檗宗の僧、またその後、長崎通事などによって伝えられた（筆者補：②）近世唐音があります。「唐音系字音」については肥爪　2005：200-212。

＊「(略)本書（筆者注：「黄檗清規」1672年上梓）にみえたる黄檗唐音は南方官話音で、その間にまま福州訛を混じてゐるにすぎない（略）」（飯田　1990：42）。

1. 「行」（ɦɛŋ）は「生」（ṣɛŋ）と同声調同韻。「行」は「（略）既に唐代よりこの二種の音（筆者注：平声宕摂唐韻haŋと平声梗摂庚韻ɦɛŋ。去声は略；陳重修　民国80：182,187）があったことが分る。」（飯田　1990：178,180）。

＊「三　行　ケイ（1、2、5）（筆者注：1は「法華懺法・例時作法」　アム（以下、引用書目の数字は略）　アン（宋唐音）　アヌ　ハン　ヒン（筆者注：黄檗音）　ヘン」（同書：178）。

＊寧波方言の「行」：「ɦã, ɦ,hiŋ」（湯・陳・呉編纂　1997：212,240,274）。

1. 「（上略）古臨済曹洞系唐音に於て、梗摂は撥ね、宕摂は撥ねない。」といふ原則を知る我々にとっては、日常茶飯事に屬する。をヲシャと撥ねないのは、尚（現代北京音shang）が宕攝の字だからであり、をアギャと撥ねるのは、行（現代北京音hsing）が梗摂の字だからである。又羊羹（ヤウカン）の羊（現代北京音yang）は宕攝の字、羹（現代北京音kêng）は梗攝の字である。」（有坂　昭和32：207-8）。
2. 原註二六には「宋朝ニハサハヲハ出生食ト云フ是ニヨリテ入宋ノ僧トモハ生飯ト書テサハトヨム宋朝ニハ生ノ字ヲサントヨムユヘ也人ヲノル（筆者注：「る」）ニモシクサント云フハト書テシカヨム也。（塵袋七）。（略）」（正宗編　昭和52：下巻462-3）。

＊「「」　（宋代の語）」（山田孝雄　昭和33：158）。「そもさん」は　禅寺での問答のさいの出題者側の語、「さあどうだ」の意。答者側は「」とこたえる。

1. 「（三六）古臨済曹洞系唐音の範圍では、諷經の唐音には促音が無い。（略）入聲韻尾は原則として脱落してゐるからである。併し、現代呉方言の狀態から察するに、古臨済曹洞系唐音の支那原音に於ける入聲の消失は、未だ完全なものではなく、本來の入聲字は、少くとも平上去聲字に比すれば、短促に發音されたものと思はれる。（略）」（有坂　昭和32：216）。

＊現代寧波・杭州方言には声門閉鎖音（/ʔ/）があります。

「甲」（答韻ɘp）・「殺」（黠韻ʌt）・「客」（陌韻ɛk）の寧波・杭州方言は「tɕiɐʔ,sɐʔ/khɐʔ」/「tɕiɑʔ,sɑʔ ,khɑʔ」（湯・陳・呉編纂　1997：324, 313, 318,鮑編纂　1998：284, 28O, 281）。

＊日本寄語：「149.前行　殺鶏→殺鶏倭（サキヲ）」（馬　2015：66）。

＊日本風土記：「前行　殺雞倭」（京大国語学国文学研編　昭和36:影印75下）。

1. 「生」は摂庚韻ṣɛŋ（注30）。「衙」は「牙」（平声麻韻疑母ŋă：魚韻・語韻は略）と同韻。「牙」の寧波・杭州方言：「ŋo/ɦiɑ」（湯・陳・呉編纂　1997：103/鮑編纂　1998：68）。
2. 日本寄語では「33.海　烏彌（ウミ）」「292.油　挨蒲頼（アブラ）」（馬　2015：

48,84）。「ウ段を表わすには遇摂、オ段を表わすには果摂の字を使う明らかな傾向があると言える。」（同書：102）。また仮摂は「日本国考略」（筆者注：日本寄語）ではア段とオ段に用いられている。」（同書：100）。

1. 『鶴林玉露』（注2）：南宋廬陵の羅大経編（1248-52）。「私の調査し得た明版についていえることは、巻四の「日本国僧」に問題の日本語（筆者注：下記）が収録されていないことである。複製の明版は重梓の万暦己亥（二七年：筆者注：1559年）本である。」（福島　昭和43：246）。

＊「硯ヲ曰フ二松蘓利必一ト筆ヲ曰フ二分直一ト・墨ヲ曰フ二蘓弥一ト」（京大國語學國文學研編昭和43：影印163上）。「天・日」はなし。「必」は衍字か。

1. 『書史会要』（注2）：元末明初の陶宗儀撰（1376年）の巻八外域・日本国の項：

「假如曰天則云そら曰地則云ち曰山則云やま曰水則云み■（筆者注：■は草体つ）曰日則云ひ曰月則云■き曰筆則云ふて曰墨則云すみ曰紙則云かみ曰硯則云すずり大意不過如此」（京大國語學國文學研編　昭和40.7：影印74）。

1. 「「泥」をシとよむことは、少くともこの日本寄語としては無理であることを免れない。」（浜田　昭和40.9：82）。日本寄語に「61.兄　挨尼（アニ）」「317.蟹　揩

泥（カニ）」（馬　2015：52,87）。

＊「「付」は「伏」の誤刻の可能性もあるので、ここの二字（筆者注：本文の「付泥」）の解読を保留とする。」（同書：43）。

＊「（上略）〔i〕〔y〕要素の直前に於ける疑母頭音の口蓋化は、近代原註三二呉方言の顯著な特色の一である。陶宗儀（浙江省黄巖の人）も、書史會要（洪武九年自序；筆者注：1376年）に於て、宜の字（筆者注：支韻疑母ŋɪe）を日本語の「に」の音に充ててゐる。」（有坂　昭和32：201-2）。書史会要では「に宜」（京大國語學國文學研編　昭和40.7：影印73）。

1. 日葡辞書には「Vofin.l,vofiru.ヲヒン.または，ヲヒル（おひん．または,お昼）貴人が眠りから目をさますとか，起き上がるとかすること.」「Vofiru.ヲヒル（お昼）Vofin（おひん）の条を見よ.」（土井・森田・長南編訳　1980：703,703）とあり。

福島氏は「太陽を「オヒ」といったことは重要なこと原注3で日本風土記の資料的価値はこんなところにもある（略）。」（福島　1993：359）とされ、その原注3（『日本言語地図6』の書評）には「（筆者補：太陽は）東北と西南にオヒサマがあり、これが古いものと思われる。（略）もっと古くからあった言葉に違いない。（略）」（『国語学』103集；福島　昭和50.3：55）とされています。しかし、日本国語大辞典には「お日」形はなく、「御日様」形であり（筆者の方言では「おひ―さん」）、上の『日本言語地図6』（原図筆者未見）によっても、「和虚」は「お日様」の「様」の誤脱（採取・表記者の誤り）とみるのが自然でしょう。

＊「お-ひ-さま【御日様】〘名〙（「お」は　接頭語。「さま」は接尾語）太陽をいう。（略）」（日本大辞典刊行会編　昭和48：4巻13）。

1. 標目「天・日・月・星」にたいする音注。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 天 | 日 | 月 | 星 |
| 日葡辞書（1603年） | Ten天空 | Fi太陽 | 月Tçuqi | Foxi |
| 日本館訳語（16世紀） | 唆喇 | 非禄 | 讀急 | 波世 |
| 琉球館訳語（16世紀か） | 甸尼 | 非禄 | 都及 | 波失 |
| 中山傳信録（1721年） | 町 | 飛 | 急 | 夫矢 |
| 吾妻鏡補（1815年） | 天道 | 烏非/倭子山馬 | 姿基 | 火四山馬 |

＊『日葡辞書』：土井・森田・長南編訳　1980：643,225,632,266。それ以外は『纂輯　日本訳語』（京大國語學國文學研編　昭和43：43,171,197,73）より。

＊『日本館訳語』：華夷訳語丙種本（1549年までに成立、楊振採録者、静嘉堂文庫本）。『琉球館訳語』：華夷訳語丙種本（呉之任採録者）。『中山傳信録』：呉江の徐葆光編。『吾妻鏡補』（注9のA）：呉江の翁広平撰。

1. 『おもろさうし』：「おもろ　「おもろ」とはもとウムイ（筆者注：「思ひ」の転訛）といったらしく、現在でも地方の神女達の謠うのはウムイという。(略)オモロは中央の貴族語、ウムイは地方の平民語として支持され伝承されてきたものである。」

（外間・西郷校注　1972：502）。

＊「全二二巻から成る『おもろさうし』は、一巻が一五三一年に、二巻が一六一三年に、三巻以下が一六二三年に編纂されているが、（略）」(外間　2002：234）。

1. A.おもろさうし（巻八）おもろ459番（前句略：外間・西郷校注　1972：166）:

「又は　月　る

昼は　てだ　る

月のに」

B.『』（外間　2002：132）:

「一てたききやなし　乾・乾坤

原注　二おてた　日天の事

校異　一　伊「てだきぎやなし」　二　田 伊「おてだ」

注釈　き。太陽の尊称。「き」は接尾美称辞「くも（雲）」の転訛。伊波本注に「奄美大島にてはテダクンガナシと云ふ」とある。」

＊「『』というのは沖縄最古のことば辞書である。一七一一年に、その当時の三司官以下七人の文人達が、国王の宣旨を受けて編輯したものである。」（同書：207）。

1. バジル・ホール・チェンバレンは「琉球語の短母音iが、日本語のiおよびeに、また、琉球語の短母音uは日本語のoおよびuに規則的に対応することを銘記すれば、研究上、幾多の語の解明に役立つであろう。（略）」（山口編訳　2005：29）とし、その研究によって「琉球語は日本語の姉妹語である」と結論づけました。この琉球語3母音（a,i,u）説はその後、伊波氏の「琉球語の母音組織と口蓋化の法則」（伊波　1974：17-46）として発展します。
2. テダが南方語（オーストロネシア語族）に源があるとする新村氏の「チダル説」（新村　昭和2：150-1）や安藤氏の「説」（安藤　昭和10：325-370）、また仲原氏の「照ら」からの変化とみる「照ら説」（次注）などを上村氏は紹介し、それらの説を批判されています（上村　1998：330-3）。

＊テダの語源説：HP（「日本語の起源」）のなかの「「ティダ」の語源を探る」（http://ichhan.sakura.ne.jp/tida/tida1.html）。

1. 「照ら説」（仲原　昭和32：80）：

「（A）　太陽　太陽はテダ（Tida）とも日（Fii又はHii）ともいうが、信仰の対象となる時、テルカハ（Teru-kaa）＝照る日、又はテルシノ（Teru-shino）＝照る日？あるいはの大主とよんだ。

テダ又は日は、物理現象であるが、テルカハ（対語テルシノ）、東の大主はその神性をさす。

テダの語源は明かでない。テリヤ（即ち照るもの）からテラになり、ラ行ダ行の混同からテダにかわったと説かれる（筆者補：下注）。

テルカハは、照るで、カは日の古語、五六の「カ」で、テルのシノも同義と見られる。ノメ（東雲）のシノも、おそらく日を意味する語で、クリヤ（日を繰る人、吉日を選ぶ人）コイ（右と同義か）などの語がある。」

＊おもろさうしのテダについては注40。

＊「琉球語のデタ（日）の如きも、やはりテラ（照）の轉音と見るべきの説、琉球語學者間に有力となれり。」（新村　昭和2：155）。「デタ」（＝テダ）は注45のcの「」にみえます。

1. A.上村氏の発表論文：

a．初考：「二　九州・琉球方言の語彙　2南九州」『方言学講座　第四巻』（昭和36.6：90）。

「（上略）とにかく現存の南九州や沖縄地方の俚言を南洋語の色眼鏡で見ないようにしたい。琉球語のティダ（太陽）も一時騒がれたように南洋語に起源があるのでなく、「天道」を琉球式に転訛したものと思われる。トカラ列島では現実に「太陽」をテンドーと言うのも参考になる。」

b. 「琉球方言の太陽を意味する語について」（初発表：「第11回西日本国語国文学会研究会での報告」（山口大学　1961（昭和36）.9　未聞）。

c. 「琉球方言の太陽を意味する語について」（初稿：『鹿児島大学文理学部文科報告」（12号　1963（昭和38）.10　未見）。

d. 「改稿　琉球方言の太陽を意味する語について」『福田良輔教授退官記念論文集』（同記念事業会編　1969：裏23-36）。cを補正、改稿。

e. 「琉球方言の太陽を意味する語について」『九州方言・南島方言の研究』（上村　1998（昭和44）：330-340）。cを上村氏自身が補正。

1. B.亀井氏の発表論文：

a.初言及について：

「かつて仲原善忠の「おもろ新釈」（一九五七刊）を紹介したそのみちすがらに《テダはおそらく「天道」から出たものであろう》（「国語学」三〇、一一六ペ）とのべたのがこの語源のことにわたくしの言及した最初であるけれども、語源のひきあてそのものはずっとまえからわたくしのあたまのなかにはあった。（略）」（亀井　昭和48：452）と「あとがき　Ⅴ　ティダの語源」にあるのですが、「国語学」（30集）には亀井氏の論説はみられず、不明。

b.「ティダの語源」『山田孝雄追憶史學語學論集』（山田忠雄編　昭和37.11：313-346）。初稿は昭和35年8月、後記は昭和36年3月。

c.「ティダの語源」『亀井孝論文集　２　日本語系統論のみち』（亀井孝　昭和48：115-149）はbの再掲。

＊cの後記のあとの「補記」に注されている『琉球譚伝真記』の「」はbの見開き写真（一葉）にみることができます。「〇日を　おでたママ　〇月を　おつきかなし（略）〇天を　うてい　〇地を　つんぢ（略）」(沖縄郷土文化研究会・南島文化資料研究室編　昭和51：272,274）。

1. 『沖縄対話』（沖縄県庁学務課編　明治13年：下之巻　第八章　単語之部　第一回）：「　ーダ　tïda」（伊波　昭和50：377）。
2. 首里方言の「砂糖・蚊帳」：「saataa⓪/kaca①’ɴcaca⓪（敬語）」（国立国語研究所編　昭和51：452,299,434）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 砂糖 | 蚊帳 |
| A.韻鏡（唐代） | 糖：1等平声唐韻定母daŋ | 帳：3等去声漾韻知母ṭɪaŋ |
| B.語音翻訳（1501年） | － | 掛帳카사 |
| C.混効験集（1711年） | おさた御砂糖なり/  さァたァ砂糖之事 | むきやちや御蚊帳 |

A：藤堂・小林　昭和46：86,86。「糖」は「堂」と同音。

B：田中訳注　1991：404。

＊「掛帳카사〔샤〕（k‘acha）

사（筆者注：saはsa）は자（筆者注：caはtʃa）の誤写に違ひない。のことは、今でもさういつてゐる。その敬語はnchachaであるが、『混効験集』には、これが「むきやちや、御蚊帳」と見えてゐる。「み・きやちやの転で、nkyachaと発音したであらう。『おもろさそうし』巻二十の三七章には、「まこ（幕）ひきやり、さげて」とある『中山伝信録』「帳子、喀着」。」（伊波　1974：109）。

＊「帳子　喀/着」（京大國語學國文學研編　昭和43：影印199下）。

C：外間　2002：50,95,177。

＊「おさた　乾・飲食（改行）原注　御砂糖なり（改行）注釈　お砂糖。「さァたァ」参照。」（同書：50）。

＊「一さァたァ　乾・飲食（略）（改行）原注　砂糖之事（略）（改行）注釈　砂糖。「おさた」参照。右下傍にァとあるのは長音を示す。今の方言では、サーターという。」（同書：95-6）。

1. 「ʔaɴzi①（名）［按司］ʔaziと同じ。」「ʔazi⓪（名）［按司］ʔaɴziともいう。位階の名。大名。（略）」（国立国語研究所編　昭和51：119,129）。

また「basjaa⓪芭蕉布/basjuu⓪芭蕉/doogu⓪道具/hoocaa⓪庖丁/şima①相撲」（同書：131,132,178,213,474）。

1. 首里方言はtidaではなく「tiida」（上書：518）。また糸満方言（本文）でも長音の[ti:ra]。村山氏は「上村孝二氏の場合とおなじく亀井孝氏の場合にもti:の長さについての説明はあたえられていない。テダは口語ではtidaではなくti:daであり,代償延長を考慮すればti:da＜説はいっそう確かさを増すとおもう。」（村山　1970.9：17）と批判されています。村山氏の代償延長については注53。
2. 「ただ古今著聞集に，天道ぼこり（日向ぼっこ）とある語を手掛かりにすれば，中世初期には「天道」が太陽を意味することが始まっていたと想像される。（略）」（上村　1998：337）。

＊古今著聞集は鎌倉時代（13世紀前半）、伊賀守橘成季が編纂した世俗説話集。

1. 天道の変化：

琉球方言でtentau（天道）→tidaと変化したと考えれば、このtentauはtendau（呉音）からの変化でしょうか。それともtentau（漢音）がtendau（新濁）となって、その後tidaに変わったのでしょうか。上村氏は「天道」がテンダウであるか、テンタウであるかという清濁の問題は不問にしてtidaへの変化を考えられましたが、意味の問題（Tendŏは空の意、Tentŏは天の道の意）ばかりか、アクセントにも関係する（注57の村山氏の批判）大事な問題です。

1. 漢語「道」（呉音dau/漢音tau）はau→aの変化を起こしたのか：

上村氏は「砂糖」（saataa）など、「沖縄方言には古くから, au＞aが主として漢語に起こっており,（略）」（上村　1998：336）、そこで「天道」はtendaになったとみられたようです。しかし「道」（效摂晧韻dau、「上古 dog→中古dau」；藤堂編　昭和53：1328）と「糖」（宕摂唐韻daŋ）は韻がちがい、「糖」は音節末に鼻音ŋをもっています。そこでたとえば「糖」（宕摂は撥ねない）は本土方言でdaŋ→dau→to：（清音化・短音化については、いま不問）、首里方言で daŋ→daa→taa：のように違った変化をしたと考えれば、au→aの長音化は「糖」（唐韻daŋ）の音節末鼻音ŋの影響によってであり、音節末鼻音をもたない「天道」にもtendau→tenda（以下、tida）の変化を単純に想定することは問題になるのではないでしょうか。

本文で紹介した亀井氏の「《ティダ》と《天道》とのできるだけ厳密なひきあて」がここでも上村氏にもとめられるでしょう。

1. 首里方言の音節末の「n音を忌避する傾向」：

村山氏は「そしてその語のn音の（筆者注：原文は「は」）脱落して*teda*という形で「おもろ」の中に頻用されることになったと推定される」（福田良輔教授退官記念論文集，p.31）と（筆者補：上村氏が）述べておられるところに多少問題がある，とおもう。nの脱落によって*teda*（＜*tenda*）が生じたのではあるまい。上村孝二氏がp.32にあげておられる例（船頭シードゥ。沖縄；南蛮ナーバル。首里；返事ヒイジ。沖縄）からも，nの脱落が先行母音の延長（つまり代償延長Ersatzdehnung）をひきおこした，と結論できるのではあるまいか。（略）」（村山　1970.9：17）と上村氏を批判されています。

＊「siɴduu⓪（名）船長。」「naɴbaɴ⓪（名）㊀南蛮。（略）」「「hwizi⓪（名）返事。」（国立国語研究所編　昭和51：479,409,242）。

ところで「按司」はʔansiei（翰韻影母ʔan/之韻心母siei）→ʔanzi→ʔazi（同書：119,129）の変化が考えられます。そこで上村氏のようにテダへの変化をn音脱落（tendau→teda）と考えると、tendau（天の道）がTendŏ（空）へと変化したと考えねばならず「天の道」と「空」との意味の違いが問題になるでしょう。またtentau（天の道：Tentŏ）にn音脱落（tentau→teta）を考えるためにはtentau→tendau→tetaかtentau→teta→tedaの無理な変化を考えなければならないでしょう。

1. 音節末鼻音*N*について：

「（上略）平安時代の前期では、

「む」「ん」/m//mu/

(なし)/n/

となって、撥音の一部分についてかな文字がないという状態であったというべきこととなる。（略）」（山田俊雄　1990：43）。

＊「**撥音便**（改行）八二三　日本霊異記訓　　啁母知阿曽弖（略）」（馬淵　昭和46：86）。

＊「（略）『土左日記』（原注2）の表記をみると、

（1） いひつかふものにもあらざなり。（改行）ししこかほよかりき。

（2） そもそもいかがよむだる。（改行）すすきにてきるきるつむだる。

という二種の撥音便があり、（1）は、撥音表記がないが、これはその音を表記すべき記号がなかったためであり、（2）は「む」で表記している。（略）」（同書：86）。

　そこで表記されることのなかった撥音ɴのもととなる音を音節末鼻音*N*（注63）と考えると、連濁はC1V*N*C2V→C1VɴC2V（ɴ：前出鼻音＝入りわたり鼻音）→C1VC2’V（C2’はC2の有声音）の変化と考えることができるでしょう。

＊この音節末鼻音*N*は以前のHP（「「ティダ」の語源を探る」の「19．鼻母音の対応について」）で鼻母音としたものです。

<https://ichhan.sakura.ne.jp/tida/tida8.html#biboin>）

1. 「お」（太陽）は「天道」の天帝の義から派生したのか：

漢語「天・天道・天帝」の意味は日葡辞書と同じで、当時の日本語「天」や「天帝」には「太陽」の意味はみられません。また日葡辞書には「太陽」の項目はなく、「Tentŏ」（テンタゥ：天道）には「〔天の道〕以上に考え及ぼしていたとは思われない。」（土井・森田・長南編訳　1980：647）とあり、当時の「天道」にも太陽の意味（＝お）はみられません。

1. 「天道」が「お」に変化したのか：

上村氏は「このような太陽の義をもつ「天道」（筆者注：上村氏があげられた例：「天道ぼこり」・トカラ列島方言にみられる「テンドー」など）が『日葡辞書』などに記載がないのは,余程この語が素僕な俗間のコトバであったか,あるいは日の当たらない方言的な物言いだったからではなかろうか。」（上村　1998：338）とみられました。しかし下の言葉（九州方言）まで集録している日葡辞書にみることのできない「お天道様」がすばやく短期間に全国的な言葉になるとはとても信じることはできないでしょう。そう考えればTentŏ（「天の道」の意）がtento:になって、そのことで太陽の意が生まれたとみるほうが自然で、日葡辞書に「お天道様」が掲載されていない事実ともよくあうでしょう。

＊「お天道様」：「ひらがな盛衰記」（浄瑠璃：1739年初演）にみえます（日本大辞典刊行会編　昭和48：3巻650）。

＊「天道tintô　造化霊妙の威徳の義から転じて、天の義となり、今日では、を意味する児童語となっている。組踊では、天の意味で使はれてゐる。（略）」（琉球戯曲辞典；伊波　昭和50：142）。

1. 天道のアクセントからの村山氏の批判：

村山氏は「を第1項とする語（天気，天下，天命，天文，天子など）は下降型アクセント（筆者注：①型）である」（村山　1988：216）ことから、｢（上略）というのは首里方言のティーダのアクセントは平板型（筆者注：tiida⓪）であり，もしの字音に由来するならば，ティーダは下降型アクセントを持つ可能性が大きいからである。アクセントを考慮すれば，字音説よりもからの変化と見る説の方が分がよさそうである。」（同書：140）と、天道がtiidaに変化したと考える上村氏を批判されています。

しかし同じ『沖縄語辞典』には「tiɴgee⓪（天蓋）/tiɴgu⓪（天狗）/tiɴgwaɴ⓪（天願）/tiɴsuu⓪（天数）/tiɴziku⓪①（天竺）/tiɴzoo⓪（天井）」（国立国語研究所編　昭和51：512,522）など平板型（⓪）も記録されています。そこで「願」（清濁声母ŋ）をのぞき、「蓋・狗・願・数・竺・井」の頭子音はすべて清声母（韻鏡：呉・漢音は清音）なので、「天道」が呉音のテンダウではなく、漢音のテンタウであれば、この「」はtiida（平板型⓪）となることが予想されるのではないでしょうか。そうであれば「この説（筆者注：上村・亀井氏のtiidaが天道の字音に由来するとする考え）はアクセントを考慮すると，説得力に欠けるうらみがあることがわかる。」（村山　1988：216）との村山氏の批判はそのままに認めることはできなくなるでしょう。

＊「tiɴ①天/tiɴci①天気/tiɴga①天下/tiɴmii①天命/tiɴmuɴ①天文/tiɴsi①天子」（国立国語研究所編　昭和51：521）。

1. 『海東諸国紀』は「Shin Sukchuが一四七一（成化七、Sŏngjong二）年に編纂したものであるが、後者（筆者注：前者は略）は一五〇一（弘治十四、Yonsan-gun七）に追加された「琉球国」という六丁のうち「語音翻訳」という約四丁ほどの部分からなり、朝鮮滞在中の琉球使臣に対してSŏng Hūian（のちに吏曹参判）が質問をして得た記録である（略）」（　1991：433）。
2. 『語音翻訳』：「硯ᄉᆞᄌᆞ리（sdzri）/墨ᄉᆞ미（smi）・筆푼디（fudi）」（伊波　1974：104/京大國語學國文學研編　昭和43：影印211上）。そこでᄉᆞ（sʌ）は現在の

ス（s）に近かったとみられるでしょう。

1. 江戸初期の狂歌に「みとり子のとゆひさし見る月や（略）」（亀井　昭和48：130）とみえます。また「ののさま」が、神仏習合の時代においては、「ほとけさま」であり、また「にってんさま」および「がってんさま」であったことのなごりであらう。」（同書：131）とすれば、「のの」はもと太陽と月の両方をさすもの、つまり発光天体とみることができるでしょう。

＊「çici⓪（名）㊀（天体の）月。㊁（暦の）月。」/「tootoo⓪㊀（名）お月様。月の小児語。（略）」（国立国語研究所編　昭和51：144,524）。

＊『おもろさうし』の「てるしの」注43の「シノ」（発光天体）の語基をノとみる村山氏の考えは「しなてる・てるしの考」（『国語学』82集：1970.9）にみられます。そこでは「私（筆者注：村山氏）は「照る」の主語，シナに「光，太陽」の意味を推定し（原注6），シナを南島（オーストロネシア又はマライ・ポリネシア）基語＊*t’inaɣ*「光」と対比した（原注7）。」（村山　1970：17）との考えが示されています。

＊「ティダ」の語源を探る」（<http://ichhan.sakura.ne.jp/tida/tida1.html>）の「第6節　発光天体の語基について」（7節も）。

1. 昨年暮れ（202212.26）、「帝」は「帝」と字形が似ていて、タと読める「帯」（泰韻tai）の誤まりではないかと気づきました。その後、5月にはいって、急遽「主人　床杲孕」の解読を中止し、久しぶりに「ティダの語源」（亀井　昭和48：115-149）を読みなおしました。そしてそのままになっていた語音翻訳の「日頭　텬다」を「」とみればtenta（天帯）→tenda→teda（テダ）の変化から、tenta（텬다：太陽）とtentau（天道→お）を関係づけられることに気づきました。
2. 「275.錦　歪帶（ワタ）（略）「錦」はH（筆者注：濱田氏）の指摘のように「綿」の誤りであろう。解読は先行研究に従う。」（馬　2015：82）。

＊「帶・大・帝」：蟹摂去声1等泰韻端母（tai）・同じく泰韻定母（dai）・蟹摂去声4等霽韻端母（tei）（藤堂・小林　昭和46：54,54,50）。

＊寧波方言：「帶ta」「大字dazɿ」「大家doko」「大dəu」「帝ti（「渧」と同音）」（湯・陳・呉編纂　1997：60,98,178,59,19）。

＊「『日本国考略』に見られる蟹摂の一二等韻はア段音に多く用いられている。「楷（カ）」「晒（サ）」「買（マ）」「大（タ）」「乃（ナ）」などがそれである。（略）338無　乃（ナイ）（改行）341不好　由無柰（ヨウナイ）（改行）これは当時において、蟹摂一二等のi韻尾が完全には消失していなかったことを意味するのかもしれない。（略）」（馬　2015：100）。

＊「338.無　乃（ナイ）」「341.不好　由無柰（ヨウナイ）」「190.死　身大（シンダ）」「348.痩　牙十大（ヤセタ）」「54.官　大米（ダイメイ；筆者注：大名）/烏野鶏（オオヤケ）」「165.唱　嘔大（ウタウ）」「230.甲　大買路（ドウマル；筆者注：胴丸）」「81.朋友　道門大聖（トモダ△）/𤄃門大帝（△モダチ）」（同書：90,90,72,91,51,68,77,55）。

1. tentaXのXについて：

語音翻訳（1501年）時代には音節末の鼻音を表記するㆁ（ŋ）/ㄴ（n）/ㅁ（m）の文字があったのですが、「日頭」の音注텬다をみればわかるように、その音節末にㆁ/ㄴ/ㅁの鼻音表記はみられません。そこで日本語の音節末にあったある種の鼻音は成希顔注58にとっては耳にとらえることのできない（表記することのできない）微妙な音であったと考えるなら、その텬다の다（ta）をtə*N*（*N*は音節末鼻音注72）などと考えることは可能でしょう。

ところで崎山氏は波照間方言の「sïkï-ng「月」；patō-ng「ハト」」（崎山　平成2：118）、またミクロネシア西部のパラウ語の「（英語store→）stoa-ng「店」」（同書：118）などにもŋがみられることから、「原オセアニア語と古代日本語との間に存在する以上のような並行的現象（筆者注：音節末鼻音ŋの存在）にたいし、言語類型地理論的にも説明が要求されるであろう。」（同書：119）と述べられています。

＊「第六章　波照間の方言の-ŋについて―「名」「歯」「雲」を表わす琉球語の祖形―」において、「原始日本語の鼻音\*-N（-mか-nか-ŋか，その質はわからない）の名残であろうと最初に指摘したのはソ連のS.A,スターロスティン君である（略）」（村山　1981.9：86）。

＊：「putugiŋ《仏》/sɨkɜŋ《月》/《naŋ》《名》」（加治工ほか　昭和50：17,23,28）。

＊首里方言：「’ju=nuɴ⓪（他=ma,=di）㊀読む。（略）」（国立国語研究所編　昭和51：290）。

＊「番外編２」の「服部説にたいして感じたことからー「首里方言の動詞終止形語末鼻音-ng」の問題について」

（https://ichhan.sakura.ne.jp/extra/extra2.html）。

1. 「てんどう-ぼこり（略）　＊古今著聞集（筆者注：1254年成）-二・六九六「ある田舎人（略）天道ぼこり（筆者注：日向ぼっこ）してゐたりけるに、（略）」（日本大辞典刊行会編　昭和50：14巻364）とあり、13世紀には「天道」に太陽の義が生じていたとみられます。

しかしそう考えると日葡辞書に「Tentŏテンタゥ（天道）」とあり、tentau（天道）とtentaX（太陽）が混交した時期をもっと早くに想定しなければなりません。そこでそれらの混交をtento:ではなく、もっと早くtentau時代に混交したと考えると、次のようになるでしょう。

tentau（天道）→tentau→Tentŏ（日葡辞書）→tento:

tentaX（太陽）---┘（混交して、「天道ぼこり」が生じた）

しかしなお問題になることがあります。日本寄語ではナ・ナイの音注字が「乃」注62（蟹摂1等海韻nəi）であることから、馬氏は「当時において、蟹摂一二等のi韻尾が完全には消失していなかったことを意味するかもしれない。」と考えられました。そこで音注「天帯」（「帯」は中古蟹摂1等泰韻tai）はテンタ（イ）とみられるでしょう。そこで語音翻訳（1501年）・日本寄語（1523年初刊）以前にテンタがtentau（天道）と混交したと考えると、日葡辞書（1603年）の「天道」がTentŏであるので（tentau＝Tentŏと考えて）、「텬다・天帯」はテンタX（→テンタウ）と考えられるでしょう。しかしもしこのXが母音であるならば、語音翻訳や日本寄語ではその語末のイ（あるいはウなど）を表記できたのではないでしょうか。そこでこのテンタX（＝tenta：텬다・天帯）は母音終わりではなく音節末鼻音*N*をもつテンタ*N*（最初の想定であるtenta＝tenta *N*）と考えるのがよいでしょう。しかしそう考えると「天道」との混交をtentauではなくテンタ*N*と考えなければならなくなり、「天道」をtentauと考えることができなくなります。

この問題にはまだまだ考えるべきことがありますが、今回はここまでとします。

1. 「語源説（1）アヒド（間処）の転〔名言通・和訓栞・大言海〕。（略）（7）アヒ（合）に、接尾語ダを添えたもの〔国語の語根とその分類=大島正健〕。」（日本大

辞典刊行会編　昭和47：1巻32）。

1. 「けだもの」：「（上略）語源説「（1）ケツモノ（毛物）の転か〔古事記伝（略）大言海〕。（2）ケは毛。ダは格助詞ツの古形で、ノの古形ナと通ずる。モノは物〔国語学論=金田一京助〕。（略）」（上書　昭和49：7巻200）。
2. 「ただむき【腕・臂】（名）ひじから手首までの部分。股をというように二つ向き合っていることによる命名か。肩から肘までをカヒナというのに対する語。(略)」（上代語辞典編修委員会編　1967：423）。

そこで「ムキ」を「向」とみて、後の「ムキ」（鼻音m）の影響でナがダに変わった（手ナ向き→手ダ向き）とみる村山説はまちがいで、「タダ」は「」と同じく「」の重複形が連濁したものとみるのがよいでしょう。

1. 「△ツブラ〔圓此云（一二・327）〕」「△木花のサクヤ姫〔佐久夜姫（記・上）〕」「△ハカマ〔栲の波伽摩を七重をし（一四・359）ハクものの意〕」「△オクカ〔知らずも(萬葉・　三八九六〕)「△カシコサ〔汝有二一(二・80)〕」「△アマタ・ココダ〔己許太かなしき(萬葉・三三七三〕)」（阪倉　昭和41：312,319,320,323 ,326,328。
2. 「くと言ひてしものを」（万三九五八）」「青なる玉藻沖つ藻」（万一三一）」「会津嶺の国を遠し（万三四二六）」「玉桙の道を遠み～」（万三九六二）」（上代語辞典編修委員会編　1967：663,170,317,408）。
3. 接頭語カの意味として、「（略）一種の色調をそえる」（上書：170）とあるのは、「これはいいかえれば、南祖（筆者注：オーストロネシア祖語）\*kaについてのゴン

ダ氏の《主観的な実現》に他ならないのではなかろうか。

　　ホソ（細）→カボソ　　ヨワ（弱）→カヨワ

このカはコに変化し、「コざかし」「コぎれい」「コ憎らしい」「コなまいき」などとして、現在まで生きて機能している。」（川本　昭和55：80）。

1. 「\*t-系列について機能的にこれを完全に保つ言語はない。（略）タガログ語talusoŋ「跳び下り」、tambuboŋ「穀倉」などは現在すでに語基であるが、lusoŋ「降下」、bubóŋ「屋根」などからかつての接頭辞（\*ta-,\*taɴ-）の残存を思わせる。（略）」（崎山　1978：121）。

＊「B.番外編　２．現代日本の三人の開拓者」の「A．川本崇雄氏」の項）。

（https://ichhan.sakura.ne.jp/extra/pioneer.html）

1. 注63ではtentaXの音節末鼻音Xは耳にとらえることのできない微妙な音*N*と考えました。そこで語音翻訳の텬다、また日本寄語の「」と音注された日本語をテンタ（太陽：tentaX＝tenta*N*）とみると、その接尾語ta*N*とオーストロネシア語族の接頭辞＊taNとの関係を考えることができるでしょう。しかしそう考えるためにはその当時の*N*は何かという問題を解決しなければなりません。

そこで詩経の「〈3〉侵（談）：蒸中東（陽）の通韻」（藤堂　昭和62：26）がこの問題を解くヒントとなるでしょう。この上古中国語の通韻は「（筆者補：上古の）此の古方言では蒸中東陽（筆者注：中古音でŋ、侵談はm）が-m型であったと考えねばならない。この-m型が何らかの理由で- ŋ化し，『切韻』に収録されたのである。（略）」（藤堂　昭和62：30）と考えられています。そこでこの通韻が行われた何らかの理由を説明するために普通の鼻音変化（CVm→CVn→CVŋ（首里・波照間方言）→CVɴ（本土方言の撥音）→C（は鼻母音）→CVⵁ（母音消失））ではなく、m→ŋの直接的な変化を想定するのがよいでしょう。そしてこの直接の鼻音変化を解くためには新羅・高麗時代の郷歌（『均如伝』1075年の「随喜功徳歌」）にみえる「～」の末音添記字「音」（中古音：侵韻ʔɪm）の表記が役に立ちます。しかし直接的なm→ŋの変化を解くためには長い考察が必要で、今回はここまでとします。

＊「郷歌の末音添記「叱」「尸」「音」について考えるー中期朝鮮語の音価を考える（その2）ー」（https:ichhan.sakura.ne.jp/korean/korean2hp.docx）の「第9節　連書字ㅱについて考える」の注21。

＊上の「は持格の助詞（郷歌第一の（17）参照）、はᄆᆞᅀᆞᆷ（mʌzʌm）と讀む。「心」は一字でᄆᆞᅀᆞᆷ（mʌzʌm：心の意）であるが、「音」（侵韻ʔɪm）は其の末音たるmを表はすために添加した字である。사ᄅᆞᆷ（sarʌm：人の意）を「人音」、구름（kurɨm：雲の意）を「雲音」とする類である。（略）」（小倉　昭和49.10：109）。（　）内の転写と注記は筆者。

＊12世紀、宋の孫穆の『雞林類事』（前田氏の『雞林類事麗言攷』による）に「雲曰屈林（改行）（原注一）구름（筆者注：kurɨm）　鮮初には구름とも（原注二）구룸（筆者注：kurum）とも話された。（略）」（前間　昭和49.6：172）。「林」（中古lɪm）は「音」（ɪm）と同じ侵韻。現代語でも구름。そこでM（郷歌：「心音」）→m（雞林類事：「屈林」）→m（現代：구름）の変化を考えるのがよいでしょう。上の原注2には『龍飛御天歌』（1447年）や『分類杜工部詩諺解』（杜詩：1481年刊）の구룸がみられます。

＊語音翻譯（1501年）にみえる首里語「我」の音注ᄝᅶᆫ、さらに『弘治五年朝鮮板伊路波』（1492年）に「う音ᄝᅮ」「ふ音ᄫᅮ」「内音우디（’uti：別作十三字類）」（京大國語學國文學研編　40.7：影印3,3,10）とあり、これらのㅱ・ㅸ表記は中国語軽唇音（つまりは日本語のハ・ワ行音）の問題を解くために役立つでしょう。

1. 「123.拿去　未低於古→末低於古（モッテユク）」」（馬　2015：61）。「帝」は去声霽韻t(i)ei。低は平声齊韻t(i)ei。

【引用書など】

＊中国・韓国人名は日本語読み。

＊複製本や再版本がある場合も初版の注記（書名・出版年・版次など）はほとんど省略してあります。

愛知大学中日大辞典編纂処編　1968　『中日大辞典』　中日大辞典刊行会（発行）　燎原（発売）

有坂秀世　昭和32　『国語音韻史の研究　増補新版』　三省堂

安藤正次　昭和10（昭和17：2版）　『古典と古語』　三省堂

飯田利行　1990（平成2）　『日本に残存せる中国近世音の研究』　名著出版

＊飯田博士著書刊行會発行（昭和30）の覆刻版。

伊波普猷　昭和49（1974）　『伊波普猷全集　第四巻』　服部四郎・仲宗根政善・外間守善編　平凡社

伊波普猷　昭和50（1975）　『伊波普猷全集　第八巻』　服部四郎・仲宗根政善・外間守善編　平凡社

大友信一　昭和38　『室町時代の国語音声の研究』　至文堂

大友信一・木村晟編　昭和47a　『吾妻鏡補所載海外奇談國語解　本文と索引』（國語資料『本文と索引』叢刊3）　小林印刷株式会社出版部発行　汲古書院発売

大友信一・木村晟編　昭和47b　『東語入門　本文と索引』（国語資料『本文と索引』叢刊4）　陳天麒編著　小林印刷株式会社出版部発行　汲古書院発売

沖縄郷土文化研究会・南島文化資料研究室編　昭和51　『翁問答・保辰琉聘録・琉球奇譚・神道記集成（解訳）　沖縄郷土文化研究会・南島文化資料研究室発行

＊翁問答（中江藤樹著）・保辰琉聘録（長崎平戸藩主松浦静山の江戸上りの記録）・琉球伝真記（薩州白岩、著）・琉球神道記（袋中著）

小倉進平　昭和49.10　『小倉進平博士著作集（一）』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學会

＊「郷歌及び吏讀の研究」(京城帝國大學法文學部紀要　第一)　 京城帝國大學　昭和4年刊）の複製

加治工ほか　昭50　『波照間の方言　琉球方言緊急調査　第２集』（沖縄県文化財調査報告書　第３集）　名嘉純一・比嘉政夫・野原三義・加治工真市（調査員）　沖縄県教育委員会

　昭和36.6　「二　九州・琉球の方言の語彙　2南九州」『方言学講座　第四巻』　東条操監修　東京堂

　1998（平成10）　『九州方言・南島方言の研究』　秋山書店

亀井孝　昭和48　『亀井孝論文集2　日本語系統論のみち』　吉川弘文館

亀井孝　昭和59　『亀井孝論文集3　日本語のすがたとこころ－（一）音韻－』　吉川弘文館

川本崇雄　昭和55　『日本語の源流 南島語起源論』（講談社現代新書） 　講談社

　1991　「言語資料としての『海東諸国紀』」『海東諸国紀　朝鮮人の見た中世の日本と琉球』（岩波文庫）　申叔舟著　田中健夫訳注　岩波書店

京大国語学国文学研編　昭和36　『全浙兵制考　日本風土記』（本文、解題、國語・漢字索引）　侯継高撰　京都大学文学部国語学国文学研究室編　京都大学国文学会

京大國語學國文學研編　昭和40.7　『弘治五年朝鮮板　伊路波　本文・釋文・解題』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

京大國語學國文學研編　昭和40.9（1965）　『日本寄語の研究』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

京大國語學國文學研編　昭和43（1968）　『纂輯日本譯語』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

倉石武四郎・折敷瀬興編　1983（3刷：1985）　『岩波日中辞典』　岩波書店

香坂順一編著　1982　『現代中国語辞典』　光生館

国立国語研究所編　昭和51　『冲縄語辞典』（国立国語研究所資料集5）　大蔵省印刷局発行

佐伯富編　昭和51　『雅俗漢語譯解』　同朋社出版部

阪倉篤義　昭和41　『語構成の研究』　角川書店

阪倉篤義　平成2　「Ⅱ報告　古代日本語の内的再構―名詞の構成法を中心に」『日本語の形成』　崎山理編　三省堂

崎山理　1978　「3　南方諸語との系譜関係」『岩波講座　日本語12　日本語の系統と歴史』　大野晋・柴田武編　岩波書店

崎山理　平成2　「Ⅱ報告　古代日本語におけるオーストロネシア語族の要素―とくに指示詞の体系について」『日本語の形成』　崎山理編　三省堂

佐藤進・濱口富士雄編　2018（4版2刷）　『全訳漢辞海　第四版』　戸川芳郎監修　三省堂

志村良治　昭和42　「Ⅲ　文法論　5　中古漢語の語法と語彙」『中国文化叢書 １ 言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

上代語辞典編修委員会編　1967　『時代別国語大辞典　上代編』　三省堂

新村出　昭和2　『東方言語史叢考』　岩波書店

伯慧　昭58　『現代漢語方言』　樋口靖訳　光生館

大東文化大学中国語大辞典編纂室編　平成6　『中国語大辞典　下　M-ZUO』　角川書店

田中健夫訳注　1991　『海東諸国紀　朝鮮人の見た中世の日本と琉球』（岩波文庫）　申叔舟著　岩波書店

陳彭年等（重修者）　民國80　『校正宋本廣韻附索引』　藝文印書舘（校正・印刷）

土井忠生・森田武・実編訳　1980　『邦訳日葡辞書』　岩波書店

湯珍珠・陳忠敏・呉新賢編纂　1997　『寧波方言詞典』（現代漢語方言大詞典・分巻）　李榮主編　江蘇教育出版社

藤堂明保・小林博　昭和46　『音注 韻鏡校本』　木耳社

藤堂明保編　昭和53　『学研　漢和大字典』　学習研究社

藤堂明保　1980　『中国語音韻論－その歴史的研究－』　光生館

　＊江南書院1979年の改版本。

藤堂明保　昭和62　『藤堂明保中国語学論集』　汲古書院

外山映次　昭和47　「第三章　近代の音韻」『講座国語史　第2巻　音韻史・文字史』　中田祝夫編　大修館書店

仲原善忠　昭和32　『おもろ新釈』　琉球文教図書発行

中本正智　1976　『琉球方言音韻の研究』　法政大学出版局

日本大辞典刊行会編　昭和47（1巻）/昭和48（3巻）/昭和48（4巻）/48（6巻）/49（7巻）/49（8巻）/49（9巻）/50（14巻）/50（15巻）/51（19巻）/51（20巻）　『日本国語大辞典』　小学館

濱田敦 1951（昭和26） 「日本寄語解讀試案」『人文研究』（大阪市立大學法文學紀要2巻1号）

浜田敦　昭和40.9　「日本寄語解読試案」『日本寄語の研究』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

肥爪周二　2005　「第8章　c.唐音系字音」『朝倉日本語講座2　文字・書記』　林史典編　北原保雄監修　朝倉書店

平山久雄　昭和42　「Ⅱ　音韻論　3　中古漢語の音韻」　『中国文化叢書 １ 言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

傅國通　2010　『方言叢稿』（浙江大學漢語史研究叢書）　　中華書局

福島邦道　昭和34.3　「「日本寄語」語解」『国語学』（36輯）

福島邦道　昭和40.7　「附録解説　書史会要」『弘治五年朝鮮板　伊路波　本文・釋文・解題』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

福島邦道　昭和40.9（1965）　「日本考略・日本図纂解題」『日本寄語の研究』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

福島邦道　昭和43（1968）　「纂輯日本譯語解題」『纂輯日本譯語』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

福島邦道　昭和50.3（1975.3）　「〔書評〕『日本言語地図6（国立国語研究所編）』」

『国語学』（103集）　国語学会編

福島邦道　1993　『日本館訳語攷』（笠間叢書263）　笠間書院

福田良輔教授退官記念事業会編　昭和44（1969）　『福田良輔教授退官記念論文集』　九州大学文学部国語国文学研究室福田良輔教授退官記念事業会編　同発行

鮑士傑編纂　1998　『杭州方言詞典』（現代漢語方言大詞典・分巻）　李榮主編　江蘇教育出版社

方松熹　1993　『舟山方言研究』　社会科学文献出版社

外間守善　2002（2版：初版1972）　『おもろ語辞書－沖縄の古辞書混効験集－』（沖縄学研究叢書3）　沖縄学研究所発行

外間守善・西郷信綱校注　1972　『おもろさうし』（日本思想体系18）　岩波書店

馬之濤　2015　『明代中国史料による室町時代の音韻についての研究－『日本国考略』を中心に－』　早稲田大学博士論文

前間恭作　昭和49.6

　『前間恭作著作集　下巻　龍歌故語箋・雞林類事麗言攷　他九篇』　　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

正宗敦夫編纂　昭和52　『覆刻　日本古典全集　塵袋　下』　現代思潮社

＊『塵袋　下』（正宗敦夫編纂・校訂）　日本古典全集刊行會編・発行（壽梓）　昭和9年）の復刻（巻六－一一）。

松本丁俊・丁鋒　1998.3　「『日本風土記・語音』中日対音考釈」『駒沢大学外国学部論集』（47号）

馬淵和夫　昭和46（6版：昭和57）　『国語音韻論』　笠間書院

村山七郎　昭和40（1965）　『漂流民の言語』　吉川弘文館

村山七郎　1970.9　「しなてる・てるしの考」『国語学』（82集）　国語学会編　武蔵野書院

村山七郎　1981.9　『琉球語の秘密』　筑摩書房

村山七郎　1988　『日本語の起源と語源』　三一書房

諸橋轍次　昭和41/42縮寫版第1刷（初版：昭和31/33）　『大漢和辭典　縮寫版　巻四・巻八』　大修館書店

安田章　昭和36　「日本風土記解題」『全浙兵制考　日本風土記　本文、解題、國語・漢字索引』　侯継高撰　京都大学文学部国語学国文学研究室編　京都大学国文学会

山口栄鉄編訳　2005　『琉球語の文法と辞典　日琉語比較の試み』　バジル・ホール・チェンバレン著　琉球新報社

＊『Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language,1895』の完訳版。旧訳（1976）は「文法の部」のみの訳。

＊上書の訳は『古琉球語で解明する邪馬台国と大和』（由良哲次訳　昭和57　田村書店）にもあり。

山田孝雄　昭和33（訂正版：初版は昭和15）　『國語の中に於ける漢語の研究』　宝文

館出版

山田忠雄編　昭和37.11　『山田孝雄追憶史學語學論集』　宝文館出版発行

山田俊雄　1990 (新装版：1977初版）　「「かな」と「かなづかい」」『日本語講座　第六巻　日本語の歴史』　阪倉篤義編　大修館書店

吉池孝一　昭和62　「『小叢林略淸規』の仮名語彙―呉方音研究資料として－」『中国語学』（234号）　中国語学会（日本）

与那国方言辞典編集委員会編　　2021（2版：初版は2019）　『どぅなんむぬい辞典』　与那国町教育委員会発行

琉球大学沖縄文化研究所編　1968　『宮古諸島（一）学術調査研究報告（言語・文学編）』　同研究所発行

渡辺三男　昭和60　『新修訳註日本考』（新典社叢書13）　新典社

　＊上は『譯註日本考』（渡邊三男　昭和18　大東出版社選書）の増補再版。